
蒼い旅人と碧の歌

古河新後

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼い旅人と碧の歌

【Nコード】

N2879E

【作者名】

古河新後

【あらすじ】

リオソウルの鎧を身に纏った旅人セル・ラウトは、幻と謳われる国、ゴルド騎士賢王国にたどり着いた。そして、ゴルドの街のひとつであるエーベルでハンター活動を始める。灼熱の大地に住まうノト村。その村を襲撃したのは紅いディアブロスだった。12/23更新、帰れ 9/17挿絵追加 はい？

プロローグ（前書き）

モンスターハンターの世界を基本としていますが、オリジナルの要素が加わっているので、それでも構わない、という読者の方々は未熟ながらこの作品をお読みください。

プロローグ（ ）

俺が彼女と出会ったのは偶然だったのかもしれない。

平原。ステイルピリスの丘。

夜の空に浮かぶ、月の光を受けながら一人の人間がある目的地を
目指して進んでいた。

その者の全身は黒に近い青で彩られた鎧に覆われている。

俗にリオソウルと呼ばれる防具で、リオレウスと呼ばれる中級飛
竜の亜種を倒して作れるハンターとしては、ソコソコの腕前である
証でもある。

背には、龍刀【隴火】と呼ばれる太刀を背負っていた。

全身防具を着ているため、年齢はおるか、性別さえも分からない。

その者は、自分がハンターとして生きていく上で、三つの決まり
事を決めていた。

一つ、理由も無く生命の命を奪ってはいけない。

二つ、戦う際に己の力を過信してはいけない。

三つ、どんな状況であろうと、自分の命を優先すること。

これは自分だけの決まり事ではなく、死んだ師の教えであった。

「もうそろそろ見えても、いいはず……」

前にいた村の長老から聞いた、ある王国の話。

ゴールド騎士賢王国。

かつて、山ほどもある巨大な龍を退けたこともあると言われてい
る。

他国との貿易はほとんど行わず、国内の豊かな生産物のみで、人々
は生活している、とのこと。

しかし、ゴールドを目指す正確な地図は無い。

それどころか、ゴールドは幻であり、実際には存在しないと
も言わ
れていた。

「……」

黙々と平原を進む鎧の者は、同じ所に永く属さない、言わば流れ
ハンターであった。

二か月ほど前に、前の村の長老に聞いた、ゴールドに行く方法。

四つの丘と、三つの森。二つの崖を抜けると、そこはもうゴールド

の地であるという。

鎧の者は数える限りでは、最後の丘を越えていた。

「本当に無かったりして」

まあ、なかったら無かったで、はっきりするな。と、思いながら歩いていると。

「ん？」

その時、何かの音を聞いた。辺りを見回す。

「こつちか……」

どうやら丘を越えた向こうのようだ。

くく。

次第に音の種類がはっきりしてきた。

歌である。誰かが歌をうたっているのだ。

本来ならば、周囲に聞こえる音は、飛竜やその他のモンスターを呼び寄せる。このためハンターはなるべく、歌どころが、大声も出さない。

くくく。

根源に近づくにつれて、歌は次第に鮮明になっていった。

そして、その場所に出る。

「・・・・・・・・」

夢のような光景を見た。

一人の人間が座りながら静かに歌をうたっていたのだ。

それだけならば、まだ納得がいく。問題はその歌を聞いている観客たちだ。

シカ科の草食獣ケルビ。

同じく草食獣のアプトノス。こちらは親子だ。

そして、金色の鱗を持つ飛竜。

それら全てがまるで母親から子守唄を聞かされているように座りこみ、その歌を聞いていた。

優しく、静かで、心安らぐ音色である。

ありえない光景だ。よく見えないが、その中心にいる者はあきらかに人だ。人とモンスターがこれほどまでに接近しているなど戦いの時以外考えられない。

「・・・・・・・・」

鎧の者は仁王立ちになってその様子を見ていた。

と、風向きが変わった。

自分の臭いを嗅ぎ取ったのか、飛竜は周囲を見回し、自分を発見する。

天高く咆哮すると、ケルビ達は逃げて行く。

そして、飛竜自身も広大な翼を広げると、突風を起こしながら羽ばたき、はるか向こうの大空へ飛んで行った。

歌はいつの間にか聞こえなくなっていた。

「悪い事をしたかな……………」

静かになった丘を見ながらそう呟く。と、

「ん？」

丘の向こうにそそり立つ、高い崖。

その割れ目に、巨大な鉄の城門が造られている。

「長老……………本当に在りましたよ」

鎧の者は城門に向かって歩みを進めた。

> i 2 2 4 5 | 3 7 3 <

新人さんですか？

ゴルド騎士賢王国。東の街。

崖に挟まれた三つの巨大な門を抜けたところに存在する町エーベル。巨大な山を段々に削り造られたエーベルは、いたる所に住居が存在し、下の市場は二日に一度本国から送られてくる物で、賑わっていた。

貧富の激しさは、無く市民は平和に暮らしている。

一番偉い者はいない。しいて言えば、エーベル衛士団総団長ガラフ・サラフネぐらいである。

エーベルの中腹辺り、それは質素な建物だ。

全体的にレンガ造りの壁に、ある程度大きな窓。板造りの屋根にレンガが取り付けられており完全に雨風防げる建物だった。

集会場レバン。ハンターだけでなく一般の客にも人気がある店だ。かなり大きな面積をしているその建物には、外にテラスが設けられ、客が座って楽しく談笑などしている。

「すいませ〜ん。ギルドに登録したいんですけど……」

落ち着いた感じに賑わっている店内で、鎧の者はカウンターに声をかけた。

「はい」

元気な声がして、従業員を着た一人の少女が走ってくる。

「こんにちはハンターさん。……………見かけない人ですね」

ジッと観察して訪ねる。

「昨日初めてここに来たから」

「新人さんですか？」

「いや。流れ者かな」

「はあい。それでは流れ者ハンターさん。こちらに名前と、年齢をお書きください」

スツと出された紙に一緒に出されたペンで記入欄を埋めていく。と、言っても二つだけだが……………

「名前はセル・ラウトさん。年齢は二十一歳。これで良いですか？」

少女が書いてあることを確認する。

「ああ」

セルは短く頷いた。

「……………人と話す時は、せめて、頭部の鎧だけでも取

るべきじゃありませんか？」

「？ ああ。ごめん。食事以外は一日中着けてたから」

と、セルは両手で頭部の鎧を取る。

短く邪魔にならない程度に切った白髪に、若々しい顔つきをしている。青年、と言う風にも見ることができた。

「・・・顔も確認しました。初めて登録する人ですね」

「？ なんで？」

「たまーに居るんですよ。二重登録する人が」

「なんで？」

「さあ。私よりも、ハンターさんの方が分かるんじゃないですか？」

「そんな事、言われてもなあ。ハンター、って人それぞれだし・・・」

「・・・」

「俺のは、ちゃんと登録できたんだよな？」

「はい」

少女はトコトコと、大量の紙が貼られた、ボードの前に行くと、

押しピンでセルの紙を止める。

「これで、貴方もエーベルのハンターです」

「……………」

「どうしました？」

「……………なんか適当じゃない？」

「気のせいですよ」

少女は笑顔で応じる。

「あと、これを」

一枚の紙をセルに渡した。

「エーベルの地図です。登録した日は依頼を受けられないので、武器兼、防具屋の位置を確認しておいてください」

セルは紙を見る。

「それではすこやかなハンター生活を」

「……か……」

セルは街の西。レバンを下った所にある一軒の武器屋兼、防具屋に来ていた。暑くなってきたため、上半身の防具は全て外し、宿に置いてきた。今は長袖の黒シャツ一枚に龍刀【朧火】を背負っている。

武器屋は、焼いた鉄を打つ音と、炎が噴き出る音が絶え間ない。

外には武器の代表的な見本が置かれている。

「ん？ よっ」

外にある武器の見本を見ていたセルに一人の青年が話しかけてきた。

健康そうに焼けた肌に頭に、はちまきを巻いている。

「あ、どうも」

「見ない顔だな？ 新人か？」

「いえ、流れ者です」

青年はセルを見ながら言う。

「ふん。そうか。俺はハンズ。ハンズ・リコール」

「セル・ラウト。よろしく」

「セルさんか……俺のことはハンズでいいぜ」

「あ、ああ」

「太刀……」

ハンスはセルの背中に背負っている武器を見て、尋ねる。

「ウチの親父、太刀にはうるさいからサ。見てもらつと

」

と、言いかけたその時、

『くらあ!! ハンス! 何やってる! とつとつ、そっちの鉄
鉱石を持ってこい!』

突如、辺りに届かんばかりの怒声が奥から響いてきた。

「げっ、だった。今持って行きまーす!」

ハンスは、山済みになっている鉄鉱石を両手で持ち上げる。

「ちよつと、待ってるよ」

と、鉄鉱石を持った状態で奥に消えた。

『おそい!! 一体なにやってたあ!?!』

『いや、表に客が』

『言い訳は聞いてねえ!!!』

ガン。何か固い物で固い物を打つ音がする。

『いつてえ〜。ハンマーで頭叩くなよ。死んだらどうすんだ!』

『うるせえ! 痛がつてねえで、とつととそつちの円盤石も持つてこい!』

『自分で叩いたくせに……』

『なんか言つたか!?!』

『なんにも!』

「……………」

セルは、薄暗い作業場を覗きこむ。

と、交互に何かを打ちつける音。

水が蒸発する音。

武器を作っているようだ。

「気になりますか?」

「うお?!」

不意に話しかけられ全身で驚く。

後ろを向くと一人の女性が立っていた。

「見かけないハンターさんですね。新人さん？」

女性はまじまじとセルを見て尋ねる。

「……………なんかいろんな人から言われるな……………」

「？ 違うんですか？」

「 ああ。流れ者だよ」

「流れ者？」

「俗に言う旅人」

女性は、納得したように、ポンっと手を打つ。

「旅人はビンボーって言いますね。 まさか！？ なにか

盗みに！？」

さつと、身構える女性。

「あゝ、いや、別にそんなつもりは無い……………」

「……………そうですね。もし泥棒だとしても、私なんかじやモンスターを相手にするハンターさんに勝てませんし」

「……………セル」

「？？」

「俺の名前」

「こんにちは。ハンターセルさん。私はリーナ・リコ
ールです。よろしく」

流れる様に言う。

「はぁ・・・どうも・・・」

「お父さんに用があるんですよね？ 呼んできます」

と、リーナは奥に入っていく。

『お父さ〜ん。お客。表にいるよ〜』

『なにい!?!?』

『だから俺が言ったじゃん。客来てんだって!』

『それを早く言え!』

『言おうとしたけど、親父がハンマーで殴ったんだろ!』

『男が言い訳するんじゃない!』

ガン。

『つ〜。殺す気か!』

『つるせえ!』

『はいはい。早く行く』

と、奥から男が出て来た。タオルで頭を覆う様に巻き、後ろで結んでいる。たくましい筋肉のついた腕には両手用のハンマーと、腰には小さいハンマーが下げている。

「お前か？」

と、まるで獲物を見るようにセルを見た。

「ぬぬ！」

さらに男の眼が光った。セルは、ほんの一瞬だが太刀に手をかける。

「ウォー！」

次の瞬間、男は両手用のハンマーを両手で持つと勢いよく振り降ろす。

「つ……！」

セルは瞬時に龍刀を抜くと、ハンマーを受け流し、そのまま返した剣で攻撃する。

地面にハンマー振り下ろした状態で止まっている男の横に一步踏み出すと、首筋に触れる寸前で龍刀を止めた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

双方沈黙。不意に男が笑った。

「フッフ・・・・・・・・ガーツハハハハ！」

「？」

その様子を何事かと、見に出て来たリーナとハンズは呆れた顔で見っていた。

「は？ 試した？」

武器屋の奥に案内されたセルは、椅子に座ってリーナと話をしていた。

「そ、お父さんの癖」

「一つだけ、遠慮なく言ってもいいか？」

「？ どうぞ？」

「死んだらどうすんだ」

「死んだら死んだで、そこまで、ハンター人生もオシマ〜イ。っ

てことです」

「よく怪我人が、出ないな……」

セルは出された、お茶を飲む。

「出ますよ」

ぶ　　つと吹き出した。

「はあ!?!」

「全員が全員、セルさんみたいに腕が立つわけじゃありませんか
ら」

「……」

「時々、診療所送りになる人もいるので、その人はもう寄りつき
ませんね。家には」

「……いつか潰れるぞ……」

「それは無いですよ。寄りつかなくなる人より、寄りつく人の方
が多いですから」

と、奥から声がした。

「ちよつと、こっちに来い！　ハンターの坊主！」

セルは声のした方に向かう。

そこには鉄の台の上に柄を外され、刀身だけの龍刀が置かれていた。

勝手に分解されてる……………

「こいつは、お前一人で作ったのか？」

「正確には素材は俺がすべて集めました」

「坊主」

「はい？」

「お前…………古龍種を殺ったな？」

セルは一瞬戸惑った様子だったが、すぐ答える。

「……………分かるんですか？」

「おう。こいつには、ナナだけじゃねえ。テオの素材も混ぜられてるな？」

「……………」

「正当な素材で作られてない武器は、長持ちしねえ」

「でも、その武器は状態を保ってる。ですよね？」

「こんな加工法は正式なモノじゃねえな。一体こいつは、どこの

誰が作った？」

「……………」

セルは、黙りこむ。

「訳ありか……まあいい。無理な詮索はしねえ」

と、いつの間にか元に戻されている龍刀【朧火】を受け取る。

「武器はハンターの命だ。大切にしろよ」

「……………はい」

セルは龍刀を背中にまわすと返事をした。

「あ、それと俺は、ヴァルオン・リコールだ。親方って呼べ！」

「そして、ここが広場か……………」

街の中心。噴水を中心に、円形に造られている広場は憩いの場である。子供達が、楽しく走り回り、鳥たちが一斉に飛び立つ。柵が作られているが景色はまさに絶景である。

「スゲー！ハンターだ！」

と、景色を見ていたセルの横に、まじまじと自分を見ている一人

の子供がいた。

「ねえねえ、にいちゃんハンターでしょ？」

「ん？ ああ」

「あんまり見ない人だけど、新人さん？」

「…………いや、違う。流れ者だよ。その事はみんなに言われる」

セルはため息をつきながら言った。

「それは、そうだよ。にいちゃん。まちにくるのって、ほとんど、ゴールドからくるか、他のまちぐらいからしか、こないからな」

「ここから出ていくハンターは居るのかな？」

「いないよ。にいちゃんみたいに、ゴールドにきたハンターはみんな住みついちゃうから」

「……………」

セルは長老の言葉を思い出していた。

ゴールドは幻であり実際に存在しないという噂もある。

「……………そういつことが」

つまり、辿り着いても出て行く者がいないのでは、噂の過程で止まってしまふ。辿り着けない者は幻としか思わないだろう。

と、角笛の音が町中に響き渡る。

「あ、お母さんの所に行かなくなっちゃ。じゃあね。にいちゃん」

走っていく少年。向こうから来た母親らしい女性に抱えられ、さらに急いで走って行った。

「……………なにが

」

遠くを見ると、無数のリオレウスがこちらに向かって飛行している。

「！ 防具は……………くそっ！」

セルは、宿に向かって走って行った。

とっつるよ

「撃てー！」

声と共に一斉にバリスタが火を噴く。

城門。衛士団は、大空から向かってくる飛竜の大軍に向かって一斉攻撃を仕掛けていた。その中にはボウガンで狙い撃つハンターの姿も確認される。

けたたましい発砲音が止むことが無く鳴り響く。

と、一匹のリオレウスが、バリスタ台に火球を放った。

「ちいっ！」

バリスタに乗っていた衛士の男は急いで台を離れ、撤退する。

直撃を受け、台は吹き飛んだ。

男は背負っているボウガンを構えると、すでに地に足をつけ味方に火球を吐いているレウスを撃つ。

「喰らえ！」

貫通弾の速射。翼や足などに食らったりリオレウスはそのまま倒れた。だが、まだ死んでいない。激痛のあまり暴れている。

そのリオレウスの頭部に勢いよく上から大剣を、他の衛士が振り

下ろす。

返り血を浴びながら、大剣を引き抜く。

「ガイ」

ボウガンの男は、大剣の男に呼びかけた。

「デイクサ。生きてたな」

デイクサと呼ばれていた男は、ガイに走り寄る。

「こんな所でくたばってたまるかってんだ。それより、なんか前より数が多くねえか？」

「ああ。二倍近くはいる」

ガイは、冷静にかえした。

元々ゴルドはモンスター達の通り道に造られた国であるため、数年に一度こういった襲撃を受ける。だが大概は、城門前で食い止められるのだが、今回は今までよりも数が多い。

その時、話している二人に向かって、上空から他のリオレウスが攻撃してくる。

二人は、左右に分かれて火球を避けると、デイクサは狙いを定めた。

ドン。

重い発射音がして、一発の弾丸がリオレウスの右翼に突き刺さる。そして、間をおいた次の瞬間、炸裂した。

レウスは痛々しく咆哮すると、バランスを失い、落下する。

地面に叩きつけられ苦しんでいる所に、ガイは自分の体重を乗せた大剣を突き刺した。

一撃で絶命する。

「そう言えば、ヤミガラスさんは？」

デイクサは弾を装填しながら尋ねる。

「組長は、コウト隊長と本国に行ってる。今はシーラさんが指揮をとってるよ」

「こっちは、ルスイがとってる。こんな時に、お互いの隊長不在とは、不運だなあ……」

装填作業を終える。と、巨影がいくつか二人の上空を通り過ぎた。

「ま……」

デイクサは咄嗟に構えて撃つが、すでに射程外であった。

「街にも、衛士達は居る。それより……」

巨大な何かが、二人の後ろに着地した。

ガイは正面を向くと、そこには通常のリオレウスより一回り大きいリオレウスが、うねり声を上げながら二人を見ていた。

「ガイ。全部終わったら、なんかおこれよ」

デイクサはボウガンを構える。

「お前こそ、死ぬなよ」

ガイは、大剣を抜く。

レウスは、大地が割れんばかりの咆哮を二人に放った。

「急いで、避難してください！」

街は大変だった。

数匹、突破してきたリオレウスに、市民たちは避難に慣れているとはいえ、混乱していた。

その中で、衛士達が迅速に安全区に誘導する。

「こっちです。早く！」

と、一匹のリオレウスが前方に降りた。

唸り声を上げて威嚇するリオレウス。

市民たちは悲鳴を上げた。

「早く！ 行ってください！」

市民に指示を出し、リオレウスの前に出る。

この命に代えてもここを通すわけにはいかない。

それぞれの武器を構える。

だが、次の瞬間、咆哮が衛士達を襲った。

「っ……っ……」

あまりの音に思わず耳をふさぐ。

レウスは、勢いよく体をのけ反らせた。

その口には炎が漏れている。

まずい。火球だ。

食らえば、岩をも吹き飛ばす威力を誇る。自分達は咆哮で、身動きがとれない。

火球を放つ。

自分達の死を覚悟した。

しかし、火球は自分達に当たらず、手前で何かに当たって散らばった。

目の前には巨大な斧のような大剣を斜めに構え、佇んでいる一人の衛士がいた。

茶色と、鋭い角が目立つディアブロ装備をつけた者である。

「大丈夫か？」

後ろ眼で自分達に尋ねた。

「すみません。……バンさん」

まだ、咆哮の効果が残っているため聞きとりづらかったが、なんとか答える。

バンと呼ばれたディアブロの男は、その言葉を確認すると、再びリオレウスを見た。

「当分リオレウスの素材には、困らないな……」

レウスはこちらに近寄ってくる。

丁度いい。離れた位置から火球を連発されるよりも接近戦の方が、早く仕留められる。

と、身構えていると、横から通り抜けるように、何かが、リオレウスに斬りつけた。

レウスはそちらを見る。

そこには、楔帷子のようなギアノス装備をした男が、片手に骨刀【竜牙】を掲げ、飛竜に劣ることのない眼で睨んでいた。

眼が合う。

レウスは男に向かって喰らいかかった。

男はその牙を右へ、左へと、回避する。

そして、一瞬の隙をつき、下から竜牙を跳ね上げた。

レウスの首が勢いよく跳ね上がる。

男は、その懐に入ると、通り抜けながら腹部を切断した。

大量の血を噴き出しながらリオレウスは絶命する。

「ガーセン。少し張り切りすぎじゃないか？」

バンはギアノスの男に話しかけた。

「これで、二だ。お前は？」

「俺も二だ。だが、敵は多い。勝負は、まだまだこれからだな」

と、武器を納めながらバンは言う。

「この勝負。俺が勝たせてもらおう」

ガーセンはそう言うと、歩いて行った。

ひびい（ ）

多くの市民が安全区へと避難する。

その非難を手助けするように、衛士やハンター達が、城門を抜けてきたリオレウス達と対峙していた。

安全に非難をしているが、大半の衛士が、城門に行き、少なくともっている街の衛士達も戦っているため、指揮する者がおらず。避難は遅々と進んでいない。

一人の女性が、安全区へと急いでいた。

と

放たれた火球により、上の建物が崩れ落ちてくる。

「っ………！」

なんとか避けたが、次に目の前にリオレウスが降りて来た。

一難去ってまた一難。

逃げようと動くが、服の一部が瓦礫に挟まり動けなくなっていた。

「!？」

目の前に立っているレウスが巨大な顎を開き、鋭い牙で女性に喰らいかかる。

「っ……………」

女性は思わず目を閉じたが、その牙がそれ以上近づいてこない。

「……………」

ゆっくり目を開けると、目の前に蒼い鎧を着たハンターが閉じる寸前で、牙を抑えていた。

短く斬られた白髪に、頭部の防具は腰に引っ掛けていた。防具と同じような色の太刀を背中に装備している。

「俺の部屋……………吹き飛ばしやがって……………」

レウスは意地でも喰らおうと、牙を進める。

男は、レウスの前に働く力を利用し、腕をひねると右の建物に向けた。

力の方向を勢いよく変えられ、レウスは背中から建物にぶつか

「ふう……………大丈夫？」

男は、女性に話しかけた。

長く、鮮やかな碧の髪。長袖の服に、ロングスカート。透き通るような青い瞳が白髪の男を見ていた。

瓦礫を退かすと、手を差し出す。

「立てる？」

女性は無言でその手を掴み、立ち上がるが、

「っ……！」

疼痛。

見ると、スカートの一部が裂け、足から血が流れていた。

「怪我……ちょっといい？」

男は、怪我をしたとき用に、いつも持ち歩いている布を取り出すと、裂けているスカートを広げ、血が出ている所に巻きつける。

「っと、スカート。ごめん」

謝る男に女性は初めて口を開いた。

「別にいい」

「それじゃあ。安全区に」

その時、なかなか立ち上がれず暴れていたレウスは、立ち上がる。

そして、二人に向かって突進してきた。

「……！」

男は、女性を抱える。

> i 2 2 5 9 | 3 7 3 <

「安全区、どこか分かる？」

急に抱えられ、ぼーっとしていた女性は、我に振り返り方向を指さす。

「あっち」

建物の向こうを指さしている。建物をまわると時間がかかるな・
・
・
・

「仕方ない」

男は向かってくるレウス頭に足をかけると、そのまま体を渡り、尻尾を踏み台にして建物の上に跳躍した。レウスは二人のいた所に音を立てて突っ込む。

「どっち？」

屋根の上で再び訪ねる。

「あっち」

指を指した方向はかなり遠い。だが、行けない距離ではない。

「よしー」

建物を通じてその方向に向かって走る。

後ろから、レウスが翼を羽ばたきながら追いかけてきた。

「……………」

後ろ眼で確認するが、かなり激怒している。

徐々に追いついてくると、顎を開き後ろから喰らいかかった。

「つと」

その瞬間、男はその場で飛び上がると下を牙が通過して行く。

レウスの背に乗ると、隣にある更に高い建物に飛び移る。

そして、安全区に向かって急ぐ。

しかし、前方上空に再びレウスが現れた。足の爪を立てると正面から自分達に向かって突き出してくる。

男は隣にある同じ高さの建物に飛び移ってその攻撃を回避する。

当たった場所は、深くえぐられた。

もう少し。あと三つ建物をこえれば……………

と、レウスはその場に足を着くと、火球をはいてくる。

「っ！」

近くが次々と吹き飛ぶ。

当たれば一貫の終わりだ。

「ちよつと、ごめんね」

「？」

男の言葉に女性は首をかしげた。次の瞬間

女性は空中で浮いた。正確には抛ほうられたのだ。

男は抛ほうると同時に、背中の武器を抜くとレウスに向かって一直線に投げる。

その武器は、炎を溜めていたレウスの頭部を内側から貫いた。

貫くと同時にレウスは横に倒れる。

男は女性を受け止めると、再び走る。

「ひどい」

女性が静かに言った。

「……本当にごめん」

心の底から謝罪すると、建物から飛び降りた。

周りから避難してくる人と、そこで誘導している衛士達は急に上

から降ってきた者を見た。

「到着……かな？」

男はそう言うと歩いて安全区の入口に行く。

「お譲様！」

と、横から一人の男が走り寄ってきた。

「ファ ガス……」

女性はその男を見る。

「無事でしたか。よかった……」

「ごめん。心配させた」

と、会話する二人に白髪の男は割って入る。

「彼女をお願いします。足に怪我をして、応急手当はしましたが、ちゃんと手当てした方がいいです」

男はファ ガスに女性を移す。

「それでは」

男は頭部の鎧をつけながら歩く。と、

「名前」

女性が静かに聞いてきた。

「ん？ ああ、俺はセル・ラウト。それじゃあ」

セルはそう答えると、まずは龍刀を回収しに再び走って行った。

詰めが甘いのよ

ドン。

重い音が鳴った。

発射された徹甲榴弾は巨大リオレウスの甲殻部に突き刺さる。

間を置いて爆発。

「どうだ？」

デイクサは、結果を見るが、わずかに甲殻が傷ついている程度のダメージだ。

「くそっ！ 質量が違うとここまで変わるものか!？」

巨大レウスは、尻尾を横なぎに振る。

「ちっ！」

デイクサはその場を飛び離れ攻撃を回避した。

その、デイクサと入れ替わるようにして、大剣を背負ったガイが接近する。

「うおおー！」

重量のある大剣を頭部に向かって振り下ろす。

食らった瞬間、レウスの頭が地面に叩きつけられる。

「・・・・・・・・・・！」

仕留めたと思っただが、わずかに頭部の鱗が斬れているだけだ。

レウスが頭を跳ね上げると同時に大剣ごとガイの体が宙を舞う。

「・・・・・・・・・・」

空中で態勢を立て直し、デイクサの隣に着地する。

「おいおい。こんなんありかよ・・・・・・・・・・」

通常の飛竜を仕留める一撃を、あっさりと受け、平然と立っているレウスを見てデイクサは驚きの声を上げた。

G級。超重量級モンスター。通常の飛竜より一回り大きく成長した飛竜の事をそう呼ぶ。

「ドンドルマの方で、大量に確認されたらしいが・・・・・・・・・・ゴルドにまで出てくるとは・・・・・・・・・・」

「なに食ってこんなに、でかくなったんだか・・・・・・・・・・」

デイクサは再び、レウスを見る。これまでの攻撃から、確実に今まで戦ってきた飛竜とは、比較にならない相手であった。

「こりゃ、覚悟しないとな・・・・・・・・・・」

「なにをだ？」

「大ケガ」

ガイはフツと笑うと、再び大剣を構える。

レウスは咆哮すると、二人に向かって突進してきた。体格が大きければ攻撃範囲も大きい。ぎりぎりまで、引きつけて避けようと思ったその時、

閃光。

レウスと二人の間で、凝視出来ないほどの光が包んだ。

「!？」

咄嗟に腕で目を庇う。

「ケイン！」

聞こえてきたのは女の声だ。そして、ああ、とそれを了承する声。ガキン。

何かがはまる音がして閃光は消えた。

見ると、巨大レウスの足に巨大な鉄器具が、取り付けられていた。

「ガイ！ デイクサ！ もたもたしない！」

わずかに反応が遅れた二人に女の声がかかる。

「ちっ……いい所取りしやがって」

デイクサは装填した貫通弾を撃つ。

「レベル2だ。威力が同じだと思っなよ！」

発射された貫通弾は、鉄器具で身動きがとれないレウスの側面にめり込む。

あまりの激痛に咆哮するレウス。

レベル2でも貫通しないとは、立っている以上にこいつは化け物だ。

次にガイが、レウスに向かって走る。

勢いよくレウスに大剣を振り下ろした。

音を立てて、頭部にヒットする大剣。

しかし、レウスはまだ生きている。

「っ……！」

二度も同じ所に叩き込んだはずなのに頭部を傷つけきれない。

「詰めが甘いよ……！」

と、レウスの眼に向かって、一本の剣が突き刺さった。

見ると、刺々しい部分が目立つクック装備を付けた女が、フレイムサイフォスを突き立てていた。

フレイムサイフォス。熱を帯びた赤い刀身と、直に熱が伝わらない黒い柄。

同時に、レウスは暴れまわる。

「おっと」

「つと」

ガイと女は急いで飛び離れる。

痛さのあまり暴れまわるレウス。

しばらくすると命が尽き、力無くその場に倒れた。

「助かった。ライナ」

ガイはクック装備を付けた女を見る。

「やっぱりいい所取り、じゃねえか」

ディクサもそこに駆け寄る。

「詰めが甘いのよ。あんた等は。目か、口の中を狙いなさいよ」

ライナと呼ばれた女が反論する。

「ボウガンは援護主体だ。精密射撃なら、弓の奴に言ってくれ」

「右に同じく」

二人の意見にライナはため息を吐く。

「ライナ……」

と、飛んできたフレイムサイフォスをライナは受け取る。

「サンキュー。ケイン」

「ああ……」

ケインと呼ばれた、紫色をしたガールが装備を付けた男は短く答えた。

「よし。次行くわよ。二人とも」

ライナはケインと一緒に先に歩く。

「……ま、二人より四人の方がいいか……」

「……だな」

ため息をつきながらガイとディクサは四人で掃討を始めた。

厄介な

セルは城門に辿り着いた。

まだ、見る限りでは二十匹近くのリオレウスが、向こう側で暴れている。

バリスタ台などは、ほとんど破壊されており、衛士達は自らの武器でレウス達を掃討していた。

と、目の前に火球が飛んでくる。

「つと」

瞬時にその場から回避した。

空を見上げると、一匹のリオレウスが翼を羽ばたき、滞空している。

「厄介な……」

次々に吐いてくる火球を走りながら避ける。

城門から下の広場に跳び下りると、目の前に他のレウスがいた。

「おつと」

レウスはセルの気配を察すると即座に振り向く。

武器を身構えた次の瞬間、

上空からエーベル全体に響き渡らんばかりの咆哮が、聞こえた。

お互いに三匹目のレウスを倒したバンとガーゼンは聞こえた方向へ顔を向けた。

他のレウスと対峙しているライナ、ケイン、ディクサ、ガイは、耳だけをそちらに向けてその咆哮を聞いた。

セルを威嚇していたレウスは、急に翼を広げると大空へと、羽ばたいて行く。

「何だ？」

セルは空を見た。すると、

「・・・・・・・・」

一匹のレウスが、遙か上空で帯空しているのが見える。

だが、そのレウスは他のレウスと異なり、蒼い姿をしていた。

リオレウス亜種。百匹に一匹の割合で、産まれるその飛竜は、堅固な甲殻を持ち、生命能力、代謝能力は通常レウスより、遙かに上回る。

中級飛竜の中でも上位に君臨する大空の支配者であった。

蒼レウスの周りに、他のレウスが集まっていく。

「一旦収集つてとこか……………」

本来リオレウスは、自らが定めた一定の領域から出ることはない。しかし、領域内で増えすぎると、一斉に食料を求めて村や、街などを襲う。

元々、ゴルドはその領域内に造られた国であるため、その領域を奪おうと、レウス達は度々、指揮するモノを中心に攻撃を仕掛けてきたのだ。

今回の指揮官はおそらく……………」

「アイツだな……………」

デイクサはたった一度の咆哮で、味方達を集めた蒼レウスを見る。味方が全滅する前に収集を集めたのか……………?

「違う……………」

ケインがまるで、心を読んでいるように横から言った。

「?」

不思議がるデイクサ。

「恐らく一斉攻撃を仕掛ける気だろう」

ガイが言った。

「はあ！？ 圧倒的に数が減ってるのは、あいつ等だぞ。逃げるならまだしも、一斉攻撃を仕掛けるだあ！？」

「馬鹿か。お前は。確かに敵の最初に比べて数は三分の二。だが、我々はその三分の一を減らすのに決定的なモノと条件があった」

ライナが言うとディクサは、その言葉の意味に気がつき、辺りを見回す。

「バリスタ台……」

見ると、ほとんどのバリスタ台が破壊されていた。

「それと、奴らが地に着けるのが条件だったな。バリスタが無い以上、上空への攻撃はかなり制限される」

ガイが今の状況を説明する。

「それらを欠いた今、勝ち目は、ほとんど零だな」

ライナが言う。

「ほとんどって事は、なんか手でもあるのか？」

「天気が急激に悪くなって雨、風、雷が起こる」

「組長達が帰ってくる」

「敵が仲間割れする……………」

ライナ、ガイ、ケインがそれぞれ言う。

「ほとんど神頼みだな……………」

三人のまず起こる事があり得ない意見を聞いてデイクサはため息をついた。

「こんな光景二度と見られないかもな……………」

セルは上空で、蒼を中心に集まっているレウス達を見てそう言った。

恐らく、最初の攻撃で、設置されている遠距離狙撃兵器を破壊し、ある程度のところで、仲間達を集めたのだ。多少、命令違反の奴が、七、八匹街に行ったようだが戦力的には、あちらがかなり有利だ。

さて、どうしたものか。不思議と焦りは無かった。と、

「ん？」

セルは足元に、一つの角笛を見つけた。

いい天気だ

再び、蒼レウスの咆哮が響く。

すると一斉に火球を上空から吐いてきた。

「ちっ
」

デイクサ達は一旦、障害物の陰に退避する。

「デイクサ。狙えないのか？」

隠れながらガイが聞いた。

「遠過ぎる。無理だ」

次々と雨のように降り注ぐ火球の中、届かないどころか、狙うのも容易ではない。

「このままだと、いずれ城門は落ちるぞ」

近くに隠れているライナが言う。

「ヤバイのは、俺も分かってるって！ たぶん、あの蒼を潰せばレウス達は統率を欠いて逃げだすはずだ」

「どうやって仕留める………?」

ケインが尋ねる。

「それを今考えて

」

その時、角笛の音が城門に響いた。

レウス達はその音を聞くと、火球の攻撃を止める。

そして、蒼レウスが咆哮で指示を出すと、一斉に音のした方へ滑空して行った。

「ふう。ここまでは成功。後は……」

セルは喰らいかかってきた先頭のレウスの牙を、前に転がって回避する。

「アドリブだな……」

龍刀【隴火】を抜き、通り抜けざまに胸部から腹部を縦に切り裂いた。

血をまき散らしながら墜落するレウス。

「まず、」

セルにレウス達は次々に襲いかかってくる。

「今度は二匹

。あ、良い事思いついた」

龍刀を一旦しまうと、後ろの壁に向かって走る。

レウスは逃がすものかと、セルの後を追いかけた。

セルは、壁に足をつけると勢いよく斜めに跳躍する。

「!?!」

レウスはそのまま壁に激突すると、動かなくなった。

「っと」

その上に乗る。さらに複数のレウスが上空から滑空してくる。

「よし。どんどん来い!」

次々に食らいかかってくるレウスに曲芸師のように飛び移り続ける。そして、

「居たな……」

かなり高くまで来た位置で蒼レウスを見た。

蒼く巨大な翼。

蒼い甲殻。

全てを殺す眼光。

体格は同じだが、他のレウスとは格の違う雰囲気纏っている。

一瞬目が合う。

蒼の目はまさに自分を見下す目だった。しかし、セルはひるまなかつた。

「無意味な事だ。これ以上、無駄な命を散らすな」

そう告げるが、人の言葉など分かるはずもない。

蒼は咆哮すると、他、全てのレウスがセルに食らいかかってきた。

横から来る牙を跳んで回避すると、体の上を疾走する。

そして、そこから跳ぶと、蒼レウスに向かって龍刀を突きだす。

しかし蒼レウスは、火球を吐く。

「!?!」

空中では避けることが出来ない。セルは龍刀を斜めに構え少しでも軽減した。

「くっ………」

爆発の煙に包まれ、落下する。

蒼レウスの攻撃は終わらない。滑空すると、その牙がセルに向かって襲いかかる。

まずい。無防備だ。

後方からも、レウスが襲いかかる。ほとんど絶体絶命であるが、そこに勝機が残されていた。

セルは体をひねると、後方から喰らいかかるレウスを口の中から頭部を貫く。

飛びながら絶命したレウスを足場に態勢を立て直した。

正面から、蒼レウスの牙が迫る。

再び跳躍。蒼レウスに向かって龍刀を突きだした。

次の瞬間、頭部に深々と龍刀が突き刺さる。

広大な断末魔を上げ、蒼レウスは絶命した。

すると、恐怖を覚えたように他のレウス達は逃げ出し始める。

セルは、端で積まれている薪の上に落下した。

「……………まだ生きてる……………」

自分の手を見ながらそう言うと、目の前に蒼レウスが降ってきた

セルは、死体に歩み寄り、龍刀を引き抜く。

「……………」

そして、空を見た。オレンジ色の夕焼けに染まっている。

「いい天気だ」

そう呟くと、立ったままその空を見ていた。

いい眼ね

「ん？ ああ、だったな……」

宿。昨日の戦いで、窓が異常なほど、広がってしまったため、かなり風通しがいい状態だった。室内も半分ほど焦げていたりしてする。

一度大きく体を伸ばすと、ベッドから降りた。

欠伸をしながら慣れた手つきで防具を着る。

……腹減った。

頭部の防具を腰につけ、龍刀【朧火】を背負うと、ボロボロの部屋を出た。

コツコツと、木製の階段を下り、扉をくぐって外に出ると、入口正面でほうきを掃いている眼鏡をかけた一人の中年男性が居た。

「おはようございます。クルクトさん」

セルが挨拶をすると、男も返す。

「ああ、おはよう。セル君。よく眠れたかな？」

「まだ暑いですから、凍死しなくて済みますけど。どうにかありませんか？」

セルは昨日のレウス騒ぎで、吹き飛ばされた部屋について尋ねた。

「大工は皆、街の修理に行ってるからねえ……………。恐らくここが修理されるのは最後あたりになるよ」

「せめて寒気が来ない内には、凍死しない部屋になってほしいです。ね……………」

「ごめんねえ。部屋は六つしかないから。まあなるべく私の方でも大工に声をかけてみるよ」

「心の底からお願いします」

セルは集会場に向かって歩くと、

「ん？」

崩れた瓦礫の間に一冊の本が落ちていた。

瓦礫を退かし、その本を手取る。

「クルクトさん」

「なにかな？」

呼ぶと、手を止めこちらを見る。

「これ、クルクトさんのですか？」

本を上げて尋ねた。

「いや。私のじゃないよ」

「そうですか」

セルは本を見る。じゃあ誰のだろう？

と、考えていると、昨日の事を思い出す。

「あ、もしかして……………」

昨日、ここで助けた一人の女性。もしかしたら彼女のものかもしれない。

「しまった……………。名前、聞いておけばよかった……………」

……………急いでいたため、名前は聞かなかったが、確か容姿は……………

「あれ？」

覚えていない。どうやら、蒼との戦いに集中して暴虐してしまったようだ。

「ふう……………。仕方無いな」

同じ所に戻すわけにもいかない。セルは後ろ腰についている要具入れに本を入れると、集会場に向かった。

セルは集会場のドアに手をかけて中に入る。中開きのドアであるため外からは入りやすい。

鈴の音と共に中に入る。

「おはようございます。ハンターさん」

入ると、目の前には登録するときに受け付けにいた少女が、受け付けに立っていた。

「ああ……おはよ。ええつと……」

少女の名前を思い出す。しかし出てこない。

「貴方にはまだ名乗ってませんよ。私はリトウです。よろしくハンターさん」

「……ああ」

セルはぎこちなく挨拶すると、ぐぐぐと腹が鳴る。

「う……何か食べるものいいかな？」

「では、適当に座っていてください。持っていくますから」

「ああ」

セルは手頃な席に座った。

「……………」

店内は普通の客もいればハンターの数も少なくない。少数ではあるが、ちらほら衛士の姿も確認できる。

「いい眼ね」

「ん？」

セルは正面を見ると誰もいなかったはずが、いつの間にか一人の女性が座っていた。

炎のような赤い髪に、全身レウス装備で身を固めている。セルと同じように頭部の防具のみつけておらず、長い髪が目立っていた。秀囲気から年齢は自分より上のようだが、どこか若さを保っているようにも見える。

「新人さん？」

その女性はニコニコしながら尋ねる。

「いえ……………あなたは……………かなり腕が立つハンター……………かな？」

「おっ！ 嬉しいねえ。自分で腕が立ちますよ、なんて言ってもバカみたいだからね」

ニシシッと歯を見せて笑う。

「でも、どうして分かった？」

女性が質問を重ねる。

「雰囲気です。本当に腕が立つハンターは、独得の雰囲気を纏っていますから……」

「ふうん。……よし、決めた！」

女性は素早く立ちあがった。そしてセルに向かって、

「今から私達、ナルガクルガを狩猟しに、行くんだけど一緒にどう？」

「いいですけど、俺まだ、朝食ってなくて……」

「そんなのいって、食べ終わるまで待つてるから。おい」

女性は店内で、手を振る。

すると、それに気づいた、二人のハンターがこちらに歩いてきた。

一人はかなり体格の大きい男だ。茶色い光沢と独特のデザインが特徴のクシャナシリーズと言う、防具を着ていた。背中にはアルバレスとヘビィボウガンが見えていた。

もう一人は、自分の胸ほどしか身長が無い少女だった。堅固な防御力を誇るサザミシリーズをつけている。背には、プロミネンスボ

ウと呼ばれるリオレウスの素材を要して作る弓が折りたたんで持っていた。

「誰？」

少女がセルを見て口を開く。

「四人目の私達の仲間よ。名前は……………」

と、女性が詰まるのを見て大柄の男が答える。

「おいおいラーシラ。名前も聞かずに仲間に誘ったのか？」

「えーと……………ノリよ。そう、ノリ！ 私には制御しきれないノリで彼を誘ったのよ」

「ノリって……………お前……………」

「……………」

男と女性のやり取りを少女は黙って見ていた。

「ええつと……………俺はセル・ラウトです。よろしく」

と、セルが自己紹介すると三人はセルを見る。

「名乗ることって……………礼儀よね。私は、ラーシラ・セイダ」

女性が言う。

「俺は、ガルダ・オーキンス。まっ、ガンナーだ。よろしくな」

大柄の男は慣れたように自己紹介する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少女はジッとセルを見たまま何も喋ろうとはしない。

「・・・・・・・・ルクル。何事も挑戦よ。自分で自己紹介しなさい」

ラシーラが言うが、すぐに彼女の後ろに隠れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

セルは、嫌われたかな。と苦笑いを浮かべる。

ラシーラはため息をつきながら、

「この子は、ルクル。ちょっと恥ずかしがり屋だけど、いい子だからよろしくね」

「どうも・・・・・・・・」

と、リトウが、料理を持ってきた。

「おまたせしましたあゝ。・・・・・・・・あれ？」

増えている三人を見て、

「注文を追加しますか？」

「悪いな。ラシーラが無理に誘ったばかりに……………」

セルを入れた、ラシーラのパーティーは、馬車乗り場に向かって
いた。

街には、所々壊れているとはいえ、最初に来た日に劣らぬ活気に
包まれている。

ラシーラとルクルは少し前を楽しそうに会話をしながら歩いてい
た。(会話と言ってもラシーラから、一方的に話すだけだが、ルク
ルは、黙って聞いていた)

「いえ、自分も、依頼を探そうと思っていた所なので、丁度良か
ったですよ」

ガルダの言葉に、セルは答える。

「……………それよりセル」

「はい？」

「ナルガクルガと、戦闘経験は？」

「……………ありますよ。一度だけ」

「ほう。若いのに経験豊富だな」

「あ、いえ。旅の途中で、奴が食事をしている所に、ばったりとはちあわせしてしまって、激闘の末に、そのまま逃しました」

セルの意見にガルダは眉をひそめた。

「逃がした？」

「はい……………。それどころでは、なかったので……………」

「……………」

「?」

「旅の途中でしたから。荷物が増えると何かと面倒なので、食べられそうにもありませんでしたし」

「…………面白い奴だな。お前は」

ガルダは微笑を浮かべながら言う。

「旅をしていると、買った物だけじゃ足りなくなるんですよ。薬草とかは、途中でほとんど採ります。食べ物は…………ブルファングですね。飛竜種は、全身筋肉質なので固くて食べられたものじゃありません」

「…………旅をする時、参考にするよ」

「ガルダさんは、ゴルドのハンターですか？」

セルの質問にガルダは、

「いいや、どっちかと言うと、ラシーラとルクルと一緒に前に居た村でハンターをやつてた。偶然、ゴルドに行く商人が村にいてな。それに同行させてもらったのさ」

「うらやましいですね。俺の場合、自力で歩いてきましたから」

「辺境の国だからな。自然に囲まれている分、飛竜種も多い。護衛をするって言ったらすぐに了承してくれたよ」

淡々と、ここに来た経歴を語る。

その時、セルは多くいる市民の中で、一人の女性と通り過ぎた。

「ん？」

その場に足を止め、後ろを見る。

今の女性ひつどこかで………

止まって後ろを見ているセルに、少し進んだガルダが声をかけた。

「なにやつてる？ 行くぞ」

その声を聞き、ガルダを見る。

「あ、すみません」

セルは急ぎ足で、ガルダに駆け寄った。

狩獵開始！

「やっぱりフィールドはいいねえ！」

昼間だと言うのに薄暗い。巨大な木々が並び日の光りを遮っているのだ。それでも、風に揺れる木々のせせらぎは心地よいものに聞こえる。

樹海。名の通りに樹の海が延々と続くその場所は、深層に進めば進むほど危険な場所となっていた。

ラシーラは馬車から下りると気持ち良さそうに体を伸ばした。その後、ルクル、ガルダ、セルの順番に降りる。

「半日後に再び参りますので」

「分かりました」

ガルダが答えると、馬車は来た道を引き返して行った。

「それではっ、諸君！」

ラシーラは勢いよく振り返ると三人を見る。

「これよりナルガクルガの狩獵を開始する！」

意気揚揚と言った。

そこにセルが手を上げる。

「はいっ！ セル君！」

「何か作戦でもあるんですか？」

「もちろん！」

「して、どのような？」

「見つけたら、フルボッコ！（フルパワーでボコボコ）これで決まりよ！」

「……………」

正直、作戦では無い。

「観念しろ。セル。ラシーラはそういう奴だ」

「なんとなく、そんな気はしてたんですが……………これで明白になりました……………」

「そこっ！ 私語はしない！」

ビシッと二人を指さす。

「ナルガクルガは、警戒心が強いのでドヤドヤ行くと出てこない可能性があまりまゝす」

「何故に先生風？」

「そこで、ナルガクルガと遭遇するまで単独行動としまーす」

「ちょっと待ってください」

セルが再び手を上げる。

「いくら、暗がりをおむナルガクルガですけど、それであって好戦的な飛竜ですよ？ 単独行動は危険だと思います」

「　　違うわ。セル君。この程度の事で怖気づいていたらハンターなんてやって行けないわ」

「.....」

「より過酷な状況をクリアしてこそ、真のハンターなのよ！」
高々と言いきるラシーラ。セルはそんな彼女を見て、

「ガルダさん」

「何だ？」

「俺ってなにか、間違えてます？」

「いや、あいつの飛竜に対する好奇心がずれてるだけだ」

「そんなもんですか？」

「ああ、そんなもんだ」

「それでは！ 狩猟開始！」

ナルガクルガ。

赤い眼に、全身黒い体毛に覆われ、前かがみの四足歩行を得意とし、長い尻尾とブレード状の翼が特長の飛竜である。

主に樹海などで目撃されている例が多く、日の下には好んで出てこない。その為か、古より生息している飛竜であるが、その生態に関する情報は少なく、遭遇したハンターからの視覚的情報以外詳しい事は分かっていない。

その生態の多くが不明である理由の一つに、暗がりを好む性質である事が一番有力である。そう言った種類には、よく臆病で非力な食物連鎖の中でも格下の印象があるが、ナルガクルガはまるで逆の性格をしている。

つまり極めて好戦的で縄張り意識の強い飛竜であり、それを守る力を持っている為、強さはリオレウスとほとんど変わらない。

一つの気配が闇の中から標的を捕えていた。

「・・・・・・・・・・」

ルクルは辺りに注意をはらい、迷わないように進んでいた。

「・・・・・・・・・・」

辺りに気配が無いと感じ取ると、自分の何倍もの太さがある大木などは特に注意しながら、次のエリアに移動する。

話によるとナルガクルガは木の上を移動する事があると聞いた。いくら何でも、数十トンとある飛竜を木が支えられる訳がない。ラシーラが情報の少ないナルガクルガの狩獵を引き受けたのはまさに好奇心だった。話の通り、木の上を移動するかしないか。それがとても気になったらしい。

「・・・・・・・・・・」

だが、自分は彼女の提案に賛成した。ハンターにとって情報は命を左右する。情報が誤っていればそれだけ危険は大きい。しかし自分にとってラシーラの意見は全てであり、同時に彼女の隣しか居場所はないのだ。ガルダは信用できる。ラシーラと一緒に私の居場所を作ってくれた。今までは、三人で全てを乗り越えてきた。なら、何故今頃になって他のハンターなどと手を組む必要があるのだろうか。

「・・・・・・・・・・」

特にあのリオソウルの防具。青い防具はあの時を思い出す。

そう、あの時、まるで楽しむように笑っていたアイツを

自分の考えに呑みこまれていたルクルは、接近してくる黒い影に気づかなかった。

からですよ

静かだ。

セルはそう思いながら歩いていた。

狩り場などにおもむくと自然に勘や神経が鋭くなる。これはハンターとして十分必要な感覚であった。

と、何かが草を揺らす音が聞こえた。風などとは違う、踏みつける様な音。弾かれたように後ろを振り向くと遙か後方でケルビが美味しそうに草を食べている光景が視界に映る。

「・・・・・・・・ふう・・」

無意識の内に太刀の柄に手が触れているのに気づき、手を離れた。

踵を返し再び歩き出す。

尋常でない感覚神経。他のハンターによっては羨ましがられたこともあった。どうすればそこまでの感覚を身に付ける事が出来るのか。とも聞かれたこともある。

必要だったのだ。あの中で生きて行くには・・・・・・・・

何度死ぬような思いをしただろうか。

火山で鎧竜に囲まれた時か？ 食料が尽きかけていた雪山で崩竜と対峙した時か？ いや、既に人として尋常ではない物を手に入れ

ていた時点で、セル・ラウトは死んでいるのかもしれない。

今立つて歩いているのはただの亡霊だ。セル・ラウトという皮をかぶり、人として必要不可欠な『日常』と言う『光』を浴びる事が出来なくなっただけだ。

その時、死角から何かが飛んできた。動じずに慣れたように避わすと、通り過ぎる前にソレを掴んだ。

ナイフである。しかも丁寧に毒まで塗ってある。

セルは持ち変えると、そのまま飛んできた所に投げ返す。

飛んで行く先には男が立つて居た。長い白髪に、女性とも思える表情。鎧ではなく、長袖に全身を包むほどの大きな上着を着ている。男に触れる寸前でナイフは消失した。

「 やりますね。流石は『蒼翼』……」

「 ……『死龍』ですか？」

セルは柄に手を掛けながら男を警戒する。

「 おっと、戦う気は無いんですよ。ただ確認しておきたかっただけです」

男は糸の様に細い目をしていた。

「 挨拶代わりにしては少々手荒ですね……」

「貴方ほどの者ならば対処できると思ったからですよ」

と、考えの読めない微笑を浮かべる。

「……………」

「そ、そう身構えないでくださいよ。先ほども言った通り私は貴方と戦う気はありませんっ！」

男は慌てて焦るように両手を振る。どこまで本気なのか全く読めないが、殺気が消えた所を見ると本当に交戦するつもりは無いようだ。

「質問に答えてもらっていない。本当の事を話してください、嘘は通用しませんよ」

今度はセルの殺気が辺りを支配する。辺りにいるケルビの群は本能で恐怖を感じ逃げるように走ってその場を後にした。しかし、男は怯む様子も無く細い目を僅かに開く。

「元、です。今はそれとは何も関係が無い」

「……………」

「それでは失礼しますよ」

男はセルに背を向けて歩き出す。

「あ、それと、連れの小さいお嬢さん。今危険ですよ」

一度止まり、思いだしたようにそう言うと、一礼して木の上に跳躍し、そのまま飛び移って行った。

男の気配が完全に消えたのを確認すると、柄から手を放す。

「連れのお譲さん……もしかして」

彼女は確かキャンプ地から北に向かった。

セルは北に対して一番近い道を選ぶと走ってその場を後にした。

大丈夫？（前書き）

更新遅くなってすみません。次はなるべく早く更新しようと思います。

大丈夫？

「・・・・・・・・」

ルクルは目の前に降りて来た黒い塊を見て行進を止めていた。

四脚歩行の骨格。長いトカゲのような尻尾を持ち、その前身は哺乳類のような黒い体毛で覆われている。体勢から、頭は地面に近い位置にあり、見上げる様な形でルクルに威嚇していた。

グルルルル・・・

ナルガが喉を鳴らす。面に迅竜などと呼ばれているが、ゴルドでは夜行性や、黒い体毛に覆われている事から、『闇の住人』と呼ばれ、認識されている飛竜である。

ルクルはナルガに隙をつくらないう、ゆっくりと背にあるプロミネンスポウに腕を持って行く。ナルガは、長い尻尾を癖のように左右に動かしていた。

腕が弓を掴んだその時、ナルガは身体を屈めると伸ばすと同時に顎を開き、ルクルに飛びかかる。

「つ・・・・・・・・」

弓から手を離すと、横に跳び、それを回避する。そして転がるように態勢を立て直し、前脚と後脚を使って向きを変えているナルガに視覚を合わせた。

再びナルガは、飛ぶように浮遊しながら、ルクルに飛びかかる。

今度は前に転がりナルガが浮いた際に出た下の僅かな空間をすり抜けるように通り抜ける。それと同時に背にある弓を掴み、展開すると同時に体勢を整えると、片膝をついた姿勢で矢を放つ。

着地をし、向きを変えているナルガに一直線に矢が飛ぶ。しかし、矢は何かに弾かれるように全く違う方向に向きをかえ、回転しながら近くの木に刺さった。

「・・・・・・・・」

完璧に敵を捉え、回避も出来ない状況を狙い、確実に攻撃はヒットしていた・・・・・・・・はずだ。だが、こちらの攻撃は弾かれた。ナルガは何をした？ その考えだけが脳裏によぎる。しかし、相手はその答えを考える間は与えなかった。

今度はステップを踏むように、左右に動きながら近づいて来たのだ。考えたものだ。これならば狙いにくい。

攻撃範囲に入ったナルガは翼末端部に付いている刃物状の爪を切り裂くように向けて来た。

ルクルは上に跳ぶと、下に向かって矢構える。弓には三本の矢が蓄えられていた。まずは、先ほどの弾かれた状況を明確に解明することだ。肝心な所で同じように攻撃を防がれては意味がない。

指の力を緩め、矢を放つ。矢はナルガの背中に列を揃えてヒットする。

疼痛に、叫び声を上げるナルガ。

ルクルは近くにある高い木の枝を掴むと、振子のように体を振って、距離を置いた位置に着地する。

「・・・・・・・・」

攻撃は当たった。先ほどののは、認識しなくては出来ないモノだったのか・・・・・・・・

憤怒のオーラを纏いながらナルガはルクルに体を向けた。ルクルも矢を引いた弓をナルガに向ける。

ネタはわかった。後は

その時、一瞬ナルガの姿が消えた。

「・・・・・・・・!？」

咄嗟に起こった敵の消失にルクルは構えを解いて辺りを見回す。

そして気づいた。敵は真上だ。

見上げた瞬間、視界に飛び込んできたのは、棘の生えた尻尾が落下してくる光景だった。

「・・・・・・・・くっ!」

横にステップを踏んで避けるが、振り下ろされた衝撃と風圧に吹き飛ばされて、近くの木にぶつかった。僅かな空間は土埃に見舞わ

れ、地面は大きくえぐれる。

「……っ」

あまりの威力に咽る。何と言う威力だ。直撃していれば確実に殺られていた。

空中で態勢を立て直し、着地しようとした瞬間、土煙からナルガが強靭な牙で喰いついてきた。

「!? しまっ」

そのまま啜えられ宙で停止する。まずい……。弓は先ほどの攻撃で地面に落ちている。

ナルガはなかなか砕けない鎧に何度も顎を閉じる。

その感覚がルクルにも伝わった。鎧により致命傷は避けているが、それも長くは持たないだろう。

だが、なんとか状況を奪回しようにも大勢が無理である。左腕は体と同じように顎に挟まれ、右腕だけ出ている状態だ。武器は下、矢も取る事は出来ない。その時、鎧にヒビが入る。

「……!!」

ナルガが噛み締める度にヒビは広がっていく。

……まだ……。死ぬわけには、行かない。お父さんとお母さん、村の皆の仇を取るまでは……。絶対に!

その時、ナルガの身体が大きく横にのけぞった。

あまりの衝撃に加えているルクルを離すと、離れた位置にある大木に激突する。

捕縛から逃れたルクルは咄嗟の事で地面に不慣れな体勢で着地した。

「大丈夫？」

声をかけられ彼女に手を差し出しているのは、リオソウルの鎧を着たセルだった。

スカイハンター？

「こっちなね」

ラシーラは、樹海にふりまかれている獣独特の殺気を感じて、特に強い北のフィールドに足を速めていた。

「ラシーラ」

横から名前を呼ばれ、視線を向けるとガルダが走り寄ってくる。

「交戦したのは誰だと思う？」

歩みを止めるとガルダに尋ねた。

「たぶんルクルだろう。彼女はどこか、意地を張る気質がある。

一人で仕留めようと考えているはずだ」

「あの子は、ナルガクルガと戦った事が無いからね」

「相手の情報が全く零というのは危険だ」

「でも、セルは私たちより速いわよ」

「まさか、お前」

一度ガルダを見て笑みを浮かべると北の入り口に向かって歩き出す。

「さ、行きますよ。なるべく早くね」

同時刻、集会場。

「ありがとうございましたー」

リトウは、最後の客をドアの外まで見送ると笑顔でそう告げた。去って行く客の背中を少しだけ眺めると、店内に戻る。

「ふいー、これで午前は終了」

そう言いながら肩を回し、丸いテーブルに置かれている、食べ終わった食器をカウンターに乗せた。

「マスター！ これもお願いーい！」

水を流す音が聞こえるカウンター奥に聞こえる様に声を上げる。

「客は全部帰ったか？」

奥から返すようにさほど大きくない声が聞こえる様に響いた。

「さっきので最後だよ」

「ほー、珍しい日もあるんだな」

その奥からまくったシャツに、赤茶の短髪をした男が手を拭きな

がら現れる。

「なにが？」

リトウは、カウンターの席に座りながら、食器を奥に運ぶ男の背中に視線を向けて尋ねた。

「お譲だよ。いつもは朝早くから、カウンターの端っこの席で本を読んでんのに、今日は来てねえ」

カウンターの一番端の席を見るリトウ。

「言われてみれば」

いつもながらの忙しい接客対応で気づかなかった。

「何かあったのかな？　ねえ、マスター」

「何かある方が、それこそ事件だよ。性格が性格だからな」

奥から戻ってきた男は椅子に座り、新聞を読み出した。

「わあ、新聞なんて久しぶりに見たよ」

「いつもは夜に読むんだが、今日は特に気になる話題があったな」

そう言いながら半分に畳まれた新聞を広げると、白黒の一枚の写真がでかかと張られた一面を開いた。そこには、イーベル内を歩いているリオレウスの写真が貼られており、題名は

「『エーベル、リオレウスの群れに襲撃される』」

男は少しだけ新聞をずらし、リトウを見る。彼女は楽しそうに微笑んでいた。

「いつも以上の被害を受けたんでしょ？」

「まあな。コウトとヤミガラスが留守と言うのもあっただろう。全体的な統率を取りづらかったようだな。二人がいれば街中に侵入されるなんて真似は、まずあり得なかった」

「ふーん。でも仲が悪いんでしょ？ その二人」

「仲が悪いからお互いに競い合っただよ。その結果が高い戦闘力になっているんだ」

そう言うと男は音を立てながら新聞をめくった。リトウの視界に見えなかった事件の記事が現れる。

「……………。本当に、衛兵団が撤退させたのかな？」

ふと、記事を見ながらそう告げた。

「たぶん、違っただろう」

「あれ？ そうなの？」

男はため息をつきながら、

「空を飛んでいるレウスを仕留めるなんて事は人間には出

入ってきた碧の髪をした女性に親しみの笑みを浮かべた。

「ちよつと遅れた」

女性は必要な事だけ喋り、トコトコといつも座るカウンターの端の席に座った。

「足、どうかしたのか？」

男は、女性が座ると同時にコーヒーの入ったカップを目の前に置いた。

「……………分かった？」

女性は両手で丁寧にそれを持ち、少しだけコーヒーを啜った。

「歩き方が違えば、誰でも気づく事だ」

溜息をつきながらそう告げる。

「昨日、怪我した」

カップを下ろして答えた。

「昨日って 避難途中で？」

リトウが横に座り質問する。

「そう」

「おいおい。俺は何も聞いてねえぞ……」

「ガザンには言わない方が良いつて、ファーガスが」

「あの野郎……」

ガザンと呼ばれた男は、椅子にドカッと座り、どこにいるかわからない同業者の顔を思い浮かべながら皮肉を漏らした。

「たぶん、マスターに余計な心配をかけさせないためじゃないかな？」

リトウの一言でガザンは大きく息を吐いた。

「あいつは心配し過ぎなんだよ。お譲はともかくな」

リトウはガザンから視線を外すと、コーヒーを再び啜っている女性に視線を向けた。

「フェニキアさん、怪我ってどこで怪我したの？ 安全区？」

フェニキアと呼ばれた女性はカップを下ろし、答える。

「道路で」

「道路？ 転んだとか？」

「違う。瓦礫が降って来た」

「それは、危なかったね」

「瓦礫に服が挟まって」

「誰かに助けてもらった？」

「ドラゴンが来た」

「……………。ほんと？」

「うん。動けなかった」

「あ、分かるよ。怖いもんね」

「服が挟まって」

「……………」

「食べられそうになった時に、助けてくれた」

「え？ 誰が？ 衛兵さん？」

「蒼い人」

「蒼い人？」

「名前……………」

「名前は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・忘れたの？」

「ううん。たぶん覚えてる」

「たぶん？」

と、フェニキアは再びカップを持ち上げた。その時、目の前に張られた、真新しいハンター登録用紙が目に入った。そこには

「セル・ラウト・・・・・・・・」

「セル・・・・・・・・ラウト？」

リトウは、その用紙に指をさしながら尋ねる。

フェニキアは一度頷くと、再びコーヒーを啜り始めた。

ルクルは差し出されている手に無意識に伸ばしていた自分の手を引っ込めると、何事も無かったかのように立ちあがった。そして、

「自分で立てる」

少しだけ怒気を含ませてそう告げると、近くに落としているフロ
ミネンスボウを拾う。

その様子を見たセルは、やっぱり嫌われてるのかなぁ……。と思いつながらナルガに向きなおした。

ナルガは態勢を立て直し、怒りをあらわにして二人を見ている。

「一つだけ頼まれてくれないかな」

セルはそんなナルガを見ながらルクルに提案した。

「ラシーラさん達を呼びに行ってくれない？ それなりの騒ぎでここに向かつて入ると思うけど……」

「……………面倒」

一瞬睨むようにセルを見るとルクルはそう告げる。

セルは少し困ったように息を吐いた。仕方ない……………

ルクルは弓を構えていつでも戦える状態でナルガを見ていた。相手もまた、こちらに襲いかかる隙を狙っている。

その時、セルは風のように疾走すると、ナルガに向かう。

「!?!」

あまりの外れた行動に、一瞬ルクルは動けなかった。

向かってくるセルに対し、ナルガは顎を開き、力強く閉じた。しかし、そこに彼の姿は無い。閉じる一瞬前にセルは横に転がるよ

うに、避けるとナルガ側面に回っていた。

そして、立ち上がると同時に勢いよく数トンはあると言つ身体を横に蹴り飛ばした。

爆発したような音と共に、のけ反りながら横に向かって宙に浮くナルガ。そのまま、崖の下に落ちて行く。

「逃げたな！ 逃すか！」

わざとらしくセルはそう言つと、ナルガを追いかけて崖を跳び降りて行った。

い・ら・な・い！

「　　と、いたいた。ルクルー！」

目的のエリアに辿り着いた、ラシーラは、崖から下を覗き込むように眺めているルクルへと走り寄った。

「ラシーラ」

無表情で、声のした方に視界を向ける。

「どうしたの？　下なんか見て　　」

「別に」

「　　ナルガが居たんだろ？」

ガルダは、近くの木に刺さっている棘状の鱗を見ながらそつ尋ねた。

「しかも、このエリアにな」

「・・・・・・・・・・」

無表情で無言を貫くルクルの頬を後ろからラシーラが引っ張る。

「ほーら、正直に言いなさい」

対して痛くも無い表情を見ながら、ラシーラは悪戯した子供を問

い詰める様な口調で言った。

「ははかった(戦った)」

聞き取り辛いと、ラシーラは手を離す。

「倒したのか？」

ガルダの言葉に首を横に振る。

「逃げられたの？」

ラシーラの言葉にも、首を横に振った。

「じゃあ、何が」

「蹴り落された」

崖の方を指差し、そう答える。

ラシーラとガルダは、崖を覗きこんだ。下は木々の枝と葉により全く高さが分からない。更にその下は光を通さないのか、完全な闇が見えた。

「ガルダー、高さわかる？」

「……分かん」

「……」

三人は崖を覗きこんでいた。

「やれやれ、どうしようかな……」

セルは宙に浮いていた。正確には、葉を抜けたあたりで、先に落ちたナルガを見失い、横の崖に龍刀を突きたててそれに掴まり、宙吊りになっていているようなものである。

下は闇によつて地面は見えないが、そう高くは無いはずだ。

柄に巻き付けている黒色の紐を解くと、ゆっくりと伸ばしながら下に降りる。その時、目の前に赤い二つの点が現れた。

「!?!」

瞬時に状況を判断すると、紐を引っ張り崖から引き抜く。自由落下が始まった瞬間、元居た位置に棘状の鱗が突き刺さった。

「暗闇で見えづらいが、正面は木か」

落下をしながらもう一度紐を勢いよく引き、龍刀を引き寄せ、横に伸びている枝にぶつかりながら、その茂みを抜けると、地面に叩きつけられるように落ちた。

「……まだ生きてる……」

痛みを生への実感と、感じながら立ち上がる。すると目の前に何

かが音を立てて降って来た。

「そつちから来てくれるとは、手間が省けたよ」

地面に刺さっている龍刀を抜き、目の前にある二つの赤い点に視線を合わせる。

周囲はかなり濃い闇だ。ナルガの目が発光していなくては、姿を捉える事も容易ではないだろう。

だが、セルには周囲の闇など、ほとんど意味は無かった。

「眼で見ると言う事がどれほど大切か……実感すらわからない……」

ナルガは、尻尾の先で円を書くように回すと、勢いよく棘状に変化した鱗を飛ばした。

「無駄だ」

龍刀を逆手に持つと、飛んでくる鱗の中で、自分に当たるモノだけを見切り、弾く。

ナルガは何度も鱗を飛ばすが、セルは飛んでくるところが分かっているように、全てを弾いて行く。

「例え、三日三晩その攻撃を続けたとしても俺には当たらないよ」

鱗が止まった。その瞬間、ナルガは高く跳び、棘の生えた尻尾を

振り下ろす。

「それもだ」

セルは龍刀を持ちかえ、刃の向きを上に向けると、勢いよく振り上げた。

尻尾が触れる刹那、鱗、肉、骨と、縦に滑らかに断ち切れ、セルの左右に分かれて地面に当たった。その際、龍刀には血の一滴も付いておらずセルは返り血一つ浴びていない。

グギヤアアアア!!

ナルガは不気味な断末魔を上げると、尻尾を左右に両断された激痛に血をまき散らしながら暴れまわる。

セルはその暴れまわるナルガに歩み寄る。

「すまない。昔だったら、苦しまずに済んだ」

詫びるようにそう言うと、ナルガは弱々しくセルに喰らいかかった。おそらく最後の攻撃だろう。瞬時にそう読み取ると、縦に龍刀を振りおろした。

「結局、出番なしね」

ベースキャンプで、馬車の到着を待っているラシーラは、近くに

ある火の消えた焚き火跡に、再び火をつけているセルを見ながらそう言った。

「すみません」

日は傾き、夕焼けとなつている。セルは付いた火が消えないまでの火力が出るまで丁寧に火を強める。

「私は良いけど、ルクルは燃えているわよ」

「え？」

「獲物をとられたー、つてね」

ラシーラは近くの木に向かって弓を撃っているルクルに指をさした。彼女は罅の入った上半身の防具を脱ぎ、インナー姿で懸命に打ち続ける。

「彼女もそんな事を言うんですね」

その言葉に手を横に振りながら、

「え？ 違う違う。あの子は一言も喋ってないわ。行動と負けず嫌いな性格を考えれば、何となく何を考えているかは、簡単にわかるのよ。実際に精密射撃の腕前は、あの子以上の人間を私は見た事が無いわ。本人も自覚してるからね」

「ラシーラさんとガルダさんも含めて？」

「んー、そうね。そうかも。」

セルはどう？ あの子以上

の頑張り屋も、あの子以上の腕前を持った人間を見たことある？」

セルはルクルに視線を向けた。

そして、弓を引くその姿に一瞬だけ一つの光景が浮かんだ。

場所は火山。自分も含め弓を持った数十人のハンターが、皆統一した訓練用の防具を着こみ、一体の鎧竜に弓を引く。

鎧竜の突進や、熱線を避けながらまるで手応えの無い無駄な攻撃を何回も何回も続ける。その内一人が突進を受けて溶岩の中に半死状態でつき落され、他の一人が熱線をくらい炭になる。しかし、まったく効果をなさない攻撃は続けられた。それでも自分達は攻撃し続けるしかない。敵の鎧が岩より固くても、こちらの攻撃が敵に対して零と言う訳ではないのだ。

いや、

そう信じなければ、戦えなかつただけなのかもしれない。そんな中でもどんだん人は死んでいった。

尻尾をくらい、壁に叩きつけられて死ぬ者。

溶岩に落ち、悲鳴を上げながら溶ける者。

咆哮により鼓膜が破れ、なす方法も無く食いちぎられる者。

そして、戦いが終わった時には、運良く急所の眼や、剥がれた胸部に矢が刺さり絶命している鎧竜を一人の男が、折れた弓を捨て血まみれの矢をもってボロボロの状態で立ち尽くしていた。

「……………ありませんね。彼女以上の人間は」

セルは少し間を開けてから独り言のようにそう告げた。

「何か、昔の事でも思い出した？」

心を見ているかのようなラシーラの言葉に、思わずセルは彼女に視線を向ける。

「私さあ、人の雰囲気と表情を見て何考えているか当てるのは得意なのよねえ」

笑顔でそう言いながら得意気にセルを見た。

「彼女は、なぜあそこまで弓を引くんですか？ ハンターとして生きるには、まだ若すぎると思いますけど……………」

その言葉に今度は少しだけラシーラが暗い表情になる。その様子をセルは察する。

「すみません」

その言葉に彼女は少し強引な笑顔を作った。

「え？ ああ、別にいいのよ。あの子は昔、住んでいた村を焼かれてね」

「・・・・・・・・」

「誤解しちゃダメよ？ あくまで私が話すのは無駄な同情をルクルにして欲しくない為だから」

一言補足を付け加えると、ゆっくりと記憶をたどるように話しました。

「あの子の村は、あの子にとって、とっても大好きな場所だったみたい。ルクルの笑顔は片指で数えるほどしか見ないけど、村にいた頃は毎日笑顔を作っていたんだと思う。でも、それは一人のハンターによって、壊された」

「一人の・・・・・・・・ハンター？」

「そう。その頃、私とガルダはギルドからの依頼を受けて、その村に数日間周囲の飛竜を討伐する為に訪れたの。村には、二人のハンターが居たみたいだけど、二人じゃどうしても手が出せないって事で私達がね。でも、そこにあつた村は燃えていた」

「・・・・・・・・」

「家屋は全て火をつけられて、村人も含めて、そこにいたハンターは皆殺されていたわ。私とガルダは懸命に生存者を捜した。すると、ルクルが血まみれで倒れていてね。その少し先の坂の上には、一人のハンターが立っていた」

「・・・・・・・・・・」

「明らかにおかしいと思ったのよ。どんな目的があったにしても、村を全て焼き払うような真似が出来るのは一個軍隊ぐらい。ましてや、ギルド所属のハンターも居たのに、それも含めて全滅。なのに、大勢の人間が通った痕跡は何一つ無かった。それ以前に、ハンター一人で村一つを焼き払う真似が出来るとは思えなかつたけどね」

「・・・・・・・・・・そのハンターは、どんな防具を？」

「そうね、私達がその場面に駆け付けた時は、ほとんど煙が充満していてシルエットしか見えなかった。でも、助けたルクルは青い鎧と言っていたわ」

「・・・・・・・・・・」

「唯一村の生存者であるルクルは、そのハンターを倒すために弓を引いている」

ラシーラは、矢を撃っているルクルへと視線を移した。

「・・・・・・・・復讐・・・・・・・・ですか？」

「たぶん違うわね。最初はそうだったみたいだけど、この四年間でよく分かってくれたわ」

「・・・・・・・・よかつた」

セルもルクルへと視線を移し、安堵する様に声を出した。

「彼女が、そんな事を背負う必要はありませんから」

と、火に視線を戻す。

「ありがとう」

その様子に静かに礼を告げるラシーラ。すると、ガルダが後ろの道から現れた。

「馬車が来たぞ。急いで乗れ」

セルは火を始末すると、龍刀を背負い、歩いているラシーラ達の後続いた。

太陽が完全に消え、月が目立つ夜空。

昼間以上の闇が存在する樹海。その一番高い樹の上で一人の女性のような雰囲気を持つ、白髪の男が笛を浮いていた。

くく

「何やってんだ？ お前」

その男に下から声がかかった。そこには同じような格好をし、黒い短い髪をした男が自分を見上げていた。

「あれ？ 知らないの？ この曲」

「歌なんて知るか。んなこと知らなくても生きていけるからな」

黒髪の男は、ぶつきらぼつにそう言つと腕を組み樹に背中を預けた。

「ゴルドの子守唄『安らぐ戦士』って唄なんだけど」

「知らね」

一度息を吐いて、そう言つと視線を上げる。

「さつさと降りてこいよ。もう行くぞ」

樹から背中を離すと、スタスタ歩きだす。その隣に、白髪の男が降りて並んで歩きだした。

「シエバーは相変わらず面白いなあ」

ニコニコしながら相手の反応を見る。

「黙れ、ギル。その首を落とされたくなけりやな」

「承知しました。最強のハンターさん」

ふざけた様にそう言つ。しかし、意外にも黒髪の男は訂正した。

「はあ？ 『最強』はお前だろつ？」

「『心』はね。『力』は君の方が上だよ」

「……口の上手い奴だ」

不機嫌そうにそう言つと、二人は樹海の闇に消えて行つた。

「あー、疲れた疲れた」

馬車から出たラシーラは一日の疲れを体感するように体を伸ばした。辺りはすっかり日が暮れ、民家に明かりがつき夜の雰囲気になつている。

「ほとんど何もしなかったのに、疲れたのか？」

次にガルダが降りて冷静につっこみを入れた。

「山登りは大変なのよ。慣れている人間でも！」

「分かつた、分かつた」

グッとガッツポーズをとるラシーラに、疲れているんだからあまりつつこませるな、とガルダは頷いた。

「それじゃ、報酬を受け取りに行きましょうか」

「あー、別にいいよ」

セルの意見にラシーラは手を振って断る。

「なんでですか？」

「実際に仕留めたのはセルだけだからな。我々が受け取る義理も無いだろう」

「でも、パーティーを組んだんですから、あくまで報酬金は平等に」

「要らない」

と、強い口調でルクルが批判した。

「あらあら」

ラシーラは楽しそうにその様子を眺める。

「彼女も防具が破損したわけです」

「要らない」

「直すのには少しでも資金があつた方がいい」

「い・ら・な・い！」

完全に敵意むき出しの眼でセルを睨むルクル。

「……………」

「ま、この子もそう言っているし、気にしないで受け取ってよ」
ルクルの頭に手を置きながらラシーラが言う。

「君はこの街に来たばかりなのだろう？ 生活費は少しでも多くあつた方がいいんじゃないかな」

ガルダは納得がいくような提案をセルに告げる。

「……………分かりました。じゃあ、ありがたく受け取ります」

「それでよろしい」

それを聞くと、セルは一言、ありがとございました。と言い、礼をすると、その場から去って行った。

「……………」

姿が消えるまで睨むような視線をセルの背中に送り続けるルクル。

「何がそんなに苛立つの？」

いつも令静で何事にも関心のないルクルがここまで、他者に対して感情を見せるのは珍しい。ラシーラは興味本位で尋ねた。

「全部」

「悪い人じゃないわよ？」

「同じ感じがした」

「……………」

「その話は宿に行つてからだ」

会話する二人の間にガルダが口を挟むと、三人は宿に向かって歩き出した。

おやすみ

「人が多いなあ………」

集会場の扉をあけたセルは、朝よりも客が多く賑わっている店内を見て、少しだけたじろいだ。客のほとんどはハンターで、防具を着ている。中には衛兵団の姿も見られた。

「あ、いらっしやいませ。ちょっと待っててくださいね！」

両手の盆に料理を乗せたりトウは忙しそうに通り過ぎる。

「はいっ！ お待たせしました！」

戻ってきた彼女はなんだか忙しそうだったが、せつかく止めたのも悪いと思い、依頼の達成証明書を渡した。

「あー、達成証明書ですね。今、ちょっと忙しいので落ち着いたところで良いですか？」

「別に良いですよ。急ぐ必要ありませんし」

「それは良かった。じゃあ、空いた席にでも座って、適当に待っててください」

早口でそう言い残し、奥に消えた。

セルは、開いている席を探す。

「お、発見」

カウンターの一番奥の席が開いているのを確認すると、そこに座った。しばらく待つが、とても人が多く、リトウはかなり忙しそうに動いている。

「よう、ご注文は？」

座っているセルに、カウンターの向こう側にいるシャツを着た赤茶の髪をした男が、話しかけて来た。

「注文　　って言うよりは、これなんですけど」

と、証明書を見せる。

「おっと悪いな。これは大方落ち着いてからだ」

「さつき、彼女に聞きました」

慌ただしく運びまわっているリトウに視線を向けた。

「他にはいないんですか？　彼女一人では大変でしょうに」

「まあ、そんなに席も多くないし、今くらいだよ。ここまで多いのは。なんなら手伝うか？」

男の言葉に少しだけ考える。早く仕事が終われば、それだけこちらの用事も早くなるかも

「分かりました。手伝いましょう」

そう言いながら、胸部の鎧と腕部の鎧を外す。

「冗談は分かるタイプか？」

その様子を見ていた男は、少し驚きながらセルに尋ねた。

「まあ、大方は」

そう言い残し、両手で危なそうに料理を運んでいるリトウに近づく。

「あれ？ どうしたんですか、ハンターさん」

「手伝うよ」

ひょいっと盆を強奪する。

「別にいいですよ。私の仕事ですし、ハンターさんは座っててください」

「君が早く終われば、俺の用事も早く終わる。俺が手伝う事に損はないと思うけど？」

そう言いながら奥に向かった。

「まあ、物好きもいたって事だ。手伝わせるよ」

男が横からそう言う。

「なるほど、そう言う事ならいいか」

そう言うのと、リトウも奥に向かった。

セルが奥に入ると、一人の女性が料理を作っていた。

「・・・・・・・・」

手を一瞬止めると、入ってきたセルに視線を向ける女性。

「あ、これ、どこに置けば良いかな？」

尋ねると女性は、隣で山積みになっている、食器の台所に視線を移した。それを理解し、そこに持って行く。そこに、リトウが入ってきた。

「フェニキアさん。後、それ三つで終わりだからー。ハンターさんは、食器を洗ってね」

そう告げて、置かれている料理を持つと、そそくさと出て行く。

「食器洗いか」

セルは腕回りをめくると、水道の蛇口をひねり、水を出すと洗いだす。しばらく洗って、ふと懐かしく感じた。小さい頃は、いつも母の手伝いをしていた。皿洗いはもちろん、洗濯物乾し、家の周

りの掃除など、嬉しい思い出ばかりだ。

不思議と微笑で作業が進む。

「楽しい？」

ふと、横から料理を作っている女性が話しかけて来た。

「え、ああ、うん。皿洗いは得意だよ」

自分でも変な返答をしたと思いながら、洗い物を続ける。

「そう……」

女性はそれっきり、何も喋らなくなった。

作業をする音と客のいる方から聞こえる賑やかな声が、沈黙に大きく聞こえる。

「ねえ」

女性が、料理を作りながら唐突に声を出す。

「生まれ変わりって信じる？」

「生まれ変わり？」

「そう」

セルはしばらく無言で作業する。そして、

「信じてる……かなあ。もしかすれば、俺自身が生まれ変わりたいのかもしれない」

「……生まれ変わりたいの？」

女性の何気ない問いに、今の自分について考えてしまった。

「……」

「手が止まってる」

「！ ああ、ごめん」

慌てて動かし始める。彼女も、無言で料理を作り続けていた。

「ありがとうございますー」

最後の客をリトウは笑顔で送り届けると、飲食終了の看板を出し、店に戻った。

「ご苦労だったな」

テーブルを拭きながらガザンがそう告げる。

「なーんか、いつも以上に多かったわね……」

椅子に座り、テーブルに伏せる様に倒れると、顔だけをガザンに向けた。

「リオレウスの所為だろう。皆、家の修理で疲れて、自分達で作るのが大変なのさ」

ガザンはそう言いながらカウンターの中に回ると、酒棚の整頓を始めた。

「……………。そう言えば、フェニキアさんとハンターさんは？」

「洗い物は終わったみたいだぞ」

「この皿はどこかな？」

セルの質問に、目線で答えるフェニキア。目的の棚を見つけると、同じ皿の上に乗せた。

「これで終わりだな」

最後の一枚を直すと、棚を閉めて作業を終わる。

ふうと息を吐き出すセル。もしかすれば、飛龍と戦うよりも疲れたかもしれない。

「あなたは」

「

また、唐突に彼女が話しかけて来た。

「生まれ変わりたいの？」

先ほどと同じ質問。しかし、先ほどよりは明確な答えを口にした。

「そうなのかもしれない。自分勝手な意見だとは思いつけど」

「普通の自由なの？」

「……………いや、もう俺の自由は普通じゃないんだよ」

「……………そう」

と、セルは彼女に微笑を浮かべた。

「でも、これから普通に、自由に生きて行く。誰がなんと
言おうとも、それが俺にとっても生まれ変わりだから」

「……………うらやましい」

「そんな大層なものじゃないよ。俺は」

「でも、うらやましい。私に選択肢はないから」

「そんな事はないさ。選択肢が一つなんて事は絶対はない。それ
は、他の選択肢に気づかないだけなんだ」

セルの言葉にフェニキアは、驚いた表情を作る。

「ハンターさん、依頼の報酬金、払いますよー」

その時、外からリトウの声が聞こえた。

「それじゃあ、さようならー」

リトウの声を背中に受けながら、セルとフェニキアは集会場を後にした。

セルは防具を肩から後ろに伸ばしている龍刀にひっかけて歩いている。

フェニキアは無言で、夜道を慣れた足取りで歩いていた。

喋る事が無いため、沈黙が両者の間に入り込んでいる。

「名前」

不意にフェニキアが、声を出した。

「ん？ ああ、俺はセル・ラウト」

「セル……？」

「？ ああ」

「どこかで……」

少し考える様な動作をするフェニキア。そして、

「蒼い人」

「ん？」

「ドラゴンから助けてもらった」

「ドラゴン？」

セルはリオレウスと戦った時を思い出した。

「まさか、あの時の？」

彼女はコクッと一度だけ縦に頭を動かす。

「　　そうか、君だったのか」

「忘れてた？」

「え、ああ、あの後色々あつて」

「良かった、私も」

「……え？」

セルは表情を変えずに歩くフェニキアを見る。

「　　足は、大丈夫？」

視線を前に戻し、あの時の怪我について尋ねた。

「浅かった」

「それは良かった」

その一言で終わり、またしばらく沈黙が続く。

「ありがとう」

フェニキアがまったく計れないタイミングでそう告げる。

「助けてくれて」

「　　良かった。そう思ってくれて」

話していると、自分の泊まる宿が見えて来た。

「ちよっと待ってて、防具を置いてくるから」

さすがに夜道を女性一人で歩かせる訳にはいかない。セルは部屋
に向かうが、

「大丈夫」

「　　いや、危ないから。家まで送るよ」

「すぐそこだから」

「でも……………」

「大丈夫」

彼女の言葉にセルはそれ以上、言えなかった。

「じゃあ、気をつけて」

最後にそう告げると、自分が宿に入るまで見届ける彼女の視線を感じながら、宿に向かう。

「名前」

セルは足を止めた。

「私は、フェニキア・シャムール」

フェニキアは、セルの眼を見ながらそう告げる。

「おやすみ、フェニキアさん」

「おやすみ、セル君」

彼女から言葉を受け取ると、宿に入って行った。

おやすみ（後書き）

やっとナルガクルガ編終了です。長いかった。と言うよりは、間が開き過ぎたせいですね。すみません。今度はどんな飛竜と戦わせようか検証中です。ディアもいいですし、ガノも良いです。たぶん次はこのどちらかになると思いますので、もし読者の方々に、リクエストがあれば、そちらを優先しようと思います。それでは

私は客よ。客！

いつもの平和な昼下がりに。

ゴルドの国から少し離れた海辺に存在する村メール。

一ヶ月毎に送られてくるゴルドからの野菜や肉類の食料は、魚類を中心とするメールにとって、大切な村の資源だった。

無償でそう言った食料が送られてくるゴルドに対し、男手の少ないメール村の人々は、とても感謝した。見返りになるとは思えないが、食料以外はなるべくゴルドの手を借りないように、周囲の飛竜は自分たちで掃討していた。

しかし、それも一匹の水竜によって大きく乱されることになった。

「もう無いんですか？」

いつもの平和な早朝。セルはカウンターの奥で新聞を読んでいるガザンに尋ねた。

「あ？ ああ。昨日から少し、少なかったからな。朝で一気に無くなったって所だろう」

新聞を読みながら投げやりに答える。横の依頼掲示板には、ほとんどの依頼が受けられ済みの印鑑が押されていた。

「遅かったねー。ホントにハンターさん」

「……………今日一日で部屋を直すから戻れないしなあ……………」

「失敗して帰ってくる人を待つしかないよ。とりあえずなんか頼む?」

と、リトウからメニューを渡された時、ドアの鈴が鳴りフェニキアが訪れる。

「いらっしやいませ」

リトウが対応する。フェニキアは、コーヒーと言ってカウンターが一番端の席に座った。

「おはよう、フェニキアさん」

セルが隣に座った彼女を見て挨拶をする。

「おはよう」

フェニキアも短く返すと、本を取り出し読み始めた。

「他に何か依頼は無いんですか? 適当に夜まで時間を潰せる奴が良いんですけど……………」

「残念だけど、その掲示板にあるやつだけで全部だよ」

「コーピーを持ってきたリトウはセルを見ながら言う。仕方無い。今日一日街をぶらぶら歩くか……」

「仕事が無いの？」

椅子から立ち上がった瞬間、フェニキアが尋ねて来た。

「少し遅くてね。全部依頼は持って行かれちゃったんだ」

「……ガザン」

今度は新聞を読んでいるガザンに視線を送る。

「何だ、お譲？」

新聞から目を離さずに言葉だけで返答をした。

「メール村のは？」

「……あれは検討中のものだ。まずは衛兵団の間が調査に行ってからハンターに任せられる依頼かどうかを判断する」

「衛兵団でも手が出なかつたら？」

「そんな事があっても良いと思っているのか？」

「ゴルド周囲なら対応は出来る。でも世界から来たモノには対応できない」

「・・・・・・・・・・」

フェニキアの言葉に少し黙りこむと、今度は笑いだした。

「そこまで否定するなよ。自分の居る国を。分かった」

ガザンはそう言うと、一枚の紙をフェニキアに渡す。

「この依頼は正当じゃないからな。どうしてもって言うなら、報酬はお譲が出してくれ」

「うん。ありがとう」

フェニキアはそれをそのままセルに渡した。

「私からの依頼。メール村に行つて」

「あ・・・・ああ」

セルは受け取ると依頼書を眺めた。

「おっはようー!!」

一般の客で賑わってきた集会場の扉が開きながら、店内に大きな声が響いた。

「いらっしやませ」

リトウが同じように対応する。入って来た客は私服を着たラシーラだった。

「シーラか。一体何の用だ？」

ガザンが入って来たラシーラに尋ねる。

「失礼ね。私は客よ。客！」

「失礼しましたお客さん。今なら鉄鉱石の Pasta がお勧めですが、いかがですか？」

「 やっぱりにここに来たら鉄鉱石よねえ ってん
なわけないでしょ！」

「で、何にするんだ？」

まるで、さっさと帰ってくれと言う表情でガザンは尋ねる。

「んー、じゃあ黄金芋酒」

「帰れ」

そう言ってガザンは奥に消えようとする。

「冗談よ、冗談」

あはは、と笑いながら手を振るラシーラ。

「……………コーヒーで良いだろ」

と、返答を聞く前にすでにカップに注いでいる。

「飲めるもんなら何でもいいわ」

古い友達をからかうように楽しそうにラシーラはニヤニヤしていた。

「ガザン。おかわり」

少し離れた席で本を読んでいたフェニキアは、コーヒーが無くなった事を確認すると、そう告げた。

「あら、フェニーじゃない」

ラシーラは呼びかけても反応すらしらないフェニキアに視線を変えた。

「久しぶり」

フェニキアは、本に目を向けながら言葉だけで返答する。

「いつも端っこで読んでるわねえ……………。そんなに面白い？」

「うん」

「そ」

邪魔をすると悪いと思い、目の前に置かれたコーヒーを啜った。

「 一体お前は何をしに来たんだ？ ただ食べに来るなんてことは、あり得ないからな」

「 読みがいいわね。数週間前に起こった、リオレウス空襲事件。おかしな所がない？」

ガゼンはおかしな所、と言う彼女の言葉に一瞬反応する。

「・・・具体的に言え」

「 正確には、始まり方と終わり方よ」

ラシーラは説明する様に付け加えた。

「 リオレウスって普通は群を組まないじゃない？ 独特の縄張りを持ち、自分以外の敵は近づけない。ただでさえ群れを組むのが理屈に合わないのに、ゴールドに集団で襲ってくるのは、更におかしいのよ」

「 古龍観測所は、大陸間を移動する為に群を組むことはあると言っていたぞ。その間に食料を求めて街などを襲う事もあるそうだ」

「 だったら普通はアプトノスの群れとか狙わない？」

「 移動途中に、ゴールドを通るんだろ」

「 それもおかしいじゃない。自然に居る草食獣は彼らにとって恰好の食料であるはずよ。多少遠回りしても、下手をすれば全滅する恐れがある人の街は避けてそっちに行くはず」

「……お前に言われなくても、その事は騎士団でも引っ掛かっているんだよ。偶然にしては出来過ぎだ。ってな」

「……嫌な予感がするわね」

ズズズツとラシーラはコーヒーを啜った。

ハンターだな？

「なんだ
」

セルはメール村を訪れて最初に驚いたのは、半円状に挟られるように消失している港だった。

その場にしゃがむと、消失している個所を隅々まで観察する。

ギザギザな挟られ方　　まるで、ここだけ喰いちぎられたような跡に見える。しかし問題はその大きさであった。

「おや？　今日は客人が多いな」

人の声と気配に気づき、セルは立ち上がった。声のする方へ視線を向けると、一人の男が網を肩に担いでいた。

「こんにちは」

「おう。鎧に武器……見たところ、ハンターだな？」

男は珍しそうな視線では無いが、まじまじとセルの格好を見て判断する。

「依頼を受けて、メール村に来たんですが……」

「依頼？　おかしいな。確か、この件は騎士団の方で調査中だったんじゃないのか？」

「個人的な依頼です」

「なるほど。金のない村の奴らが、依頼するとは思えない。部外者でも、気にかけてくれる奴は居るんだな」

男は嬉しそうに言葉を発した。

「それで、聞きたいんですが……この扱われた後は

」

「水神様だ」

「水神様？」

セルは男の言葉に疑問を頭に浮かべながら尋ねる。

「昔、海は人の物では無かった。海を使うことが許されるのは、水神様と、それに認められた者だけだ。しかし、海には人が求めた物が大量に存在していた。そして、人は水神様から『海』を奪った」

「奪った？」

「正確には、水神を排除したというのが正しい。しかし、近年になって水神様は帰って来た。『海』を奪い返すために

」

「……あなたは、そんな事を信じているんですか？」

セルの言葉に男は、深刻な顔を解くと、僅かに微笑んだ。

「そんな訳ないだろ。俺は、爺さんたちみたいにカビの生えた伝説なんて信じていない。水神は水竜」

ガノトトスだ」

「……やっぱり」

「それも、普通サイズじゃない。常識を逸脱した大きさや破壊力から、掃討レベルは星七を超えるもんだろっな」

「大きさはどのくらい分かかります？」

「奴が直立すると、太陽が見えなくなる。それくらい、でかい化け物だ。普通サイズなら、俺達だけでも何とかなるが、今回の奴は異常だ。やむ負えなく、ゴルドに救援を求めたって訳さ」

男は挟られた場所に持つてきたロープを柵の様に張る。

「魚が捕れないと、村全体の食料が厳しくてね。なるべく早く解決してもらいたいもんだ」

「先ほど、客人が多いと言いましたが、他にもハンターが？」

セルの言葉に男は作業をしながら答えた。

「いや、エーベルの衛兵士だよ。手紙を出して一週間もしない内に来てくれるとは、ありがたい事さ」

「彼らは今どこに？」

「さあな。独自に調査すると言っていたから、おそらく……」

・・反対側の海岸だろう」

男は密林を挟んで反対側にあるであろう海岸を指さした。

魚竜目 有脚魚竜亜目

水竜上科トトス科

全長 約2400cm

全高 約1000cm

足の大きさ 200cm

原種別名 水竜

亜種別名 翠水竜

体重の制限が無い水中で成長する為、飛竜の中でも大型の部類に入り、広い攻撃範囲と高い攻撃力を持つ。長く突き出たサメの様な頭部を持ち、口から強烈な水流ブレスを吐く他、トビウオの様に滑空しながら、催眠作用のある毒を持つヒレで斬りつけて来る事があ

る。
二本の脚で陸に上がる事も出来るが、巨体ゆえに、陸上での動きは鈍く、捕食は水中、あるいは水辺の生物を水中に引きずり込んで行う。その牙は何重にも重なっているため、一度啜えられれば逃げ

出す事はほぼ不可能。海や体格の小さいものなら川まで、その生息範囲は幅広く、ゴルドでは、殲滅対処として指定されている。

凄まじい轟音と、爆発の様に砂浜は抉れた。

水竜ガノトトス。その大きさは飛竜の中でも一回り大きく、相当するには、多くの物が必要だった。中でも、音に弱いガノトトスに対して、高音波を発する　　音爆弾は、水中から引きずり出すのに必須アイテムだ。

今現在、そのガノトトスと対峙している影が三つ存在していた。

その内の二つは、エーベルの衛兵士公認の鎧をつけている。

デイクサとガイであった。彼らは、今だ街の復興で忙しいエーベルから、緊急の要請を受けて、メール村に調査に訪れていた。本来なら、標的の生態、生活環境などの、情報を集めるのが目的であった。もし、標的と遭遇したとしても、顔合わせ程度に撤退する様に命令も受けている。しかし、村人に聞いた場所で、くさいと睨んだ場所への移動途中、標的と遭遇してしまった。

「たった一撃でこの威力かよ?!」

デイクサは、ガノトトスから吐き出された水流の着弾地を見て声を上げた。柔らかいとは言え、その場所はまるで大砲に撃たれた以上に大きく抉れている。

「身体がでかいと、威力も数倍だ！ 絶対に当たるなよ！」

ガイは回転してくる尻尾を避けながらデイクサに告げる。

「誰がくらうか！ クソツ！ こんな事なら、殲滅用に色々持ってくるんだっただぜ」

元々、調査で済ませる予定であった二人は、まともに道具を持ってきていなかった。大剣を使用するガイは、最低限の装備でも戦えるが、ガンナーであるデイクサは、貫通弾と散弾のレベル2しか持ってきていない。広範囲で、近づく事の難しいガノ戦では、ガンナーが勝利のキーだ。しかし、予想に反する大きさであったため、明らかに火力不足であった。

と、放たれた水流が、横に移動してきた。

「やべえ」

避けられない。デイクサがそう思ったその時、

シユル

ガノトトスに細いロープが巻きついた。頭部に巻きついたロープは先端に鉤の様なフックが取り付けられている。それとロープを強く縛りつけ、口を強制的に閉じる。

「　　ファオラ！」

デイクサは反対側で、伸びきったロープを両手と全身で押さえている女を見て声を上げた。

全身の防具は統率性のないバラバラの仕様だ。頭部には鎧は被らずにピアスをつけ、胸、腕、腰、脚、は順に、ガレオスレジスト、フルフルガード、バサルコート、リオソウルレギンスと言う装備だ。顔立ちは前髪を残して、残りは後ろに流し、ヘアバンドで止めている髪をしていた。童顔である為、少女の様な雰囲気を持っている。

「大丈夫でございますか!？」

ファオラは、反対側からでも聞こえるほどの大声をデイクサに聞こえる様に告げた。

「悪りい！ 助かった！」

デイクサは大声で返答する。

「あまり気を抜くな。敵の攻撃は、一直線とは限らないぞ」

ガイは、デイクサの横を走り抜けると、大剣を砂浜で擦らせながら、ガノに接近していく。

ファオラによって頭部の動きが抑えられている今、真下は死角だ。そして狙うは足。まずは、動きを鈍らせる

しかし、ガノは力任せに頭部を引っ張り上げた。

「わわっ!？」

力強くロープを押さえていたファオラは、軽々と空中に投げ出さ

れる。

「ファオラ！」

ゆるんだ拘束から解除されたガノは、宙に浮くファオラに向かって、丸飲み出来そうなほどの大きな口を真下で開いた。

「っ！ 残念ながら食べられるのは趣味ではございませんっ！！」

冷や汗を浮かべながら、後ろ腰に×字に携えている二本の剣の内、白い刀身をした剣を抜いた。

インセクトスライサー。

その双剣はそう呼ばれている。属性は皆無だが、中々落ちない斬れ味と、攻撃力は双剣の中でもトップクラスの剣だ。

左手でロープ、右手に剣と、突貫覚悟で地獄の着地点に身構える。そのとき、開いていたガノの大口が、音を立てて横に逸れた。何が起こったかを確認すると、ディクサが構えているボウガンから硝煙が立ち上がっている。

「
」

ファオラは、空中で一回転してロープを腕に巻きつけると、のけ反っているガノの横首を、滑り降りる様に切り裂いた。

そしてロープを引っ張り、絡まりを解くと、足を曲げてクッション代わりにし、地面に着地する。

「助かりました」

近くに居るデイクサに礼を言う。

「気にすんな。それより、今ので、徹甲榴弾はおしまいだ」

と、その横にガイがバックステップを踏んで下がって来る。

「ガイ！ 明らかに火力不足だ。どうする？」

「こつちも音爆弾はあと二つ。大きさが大ききなだけに、普通の物だと、ほとんど効果がない」

あまりにも状況が不利だ。せめて、デイクサが万全の状態ならば、何とかなるのだが………

その三人にガノトトスが視線を向ける。その横の首筋についている細い傷から、出血しているが、既に止まり始めていた。

「私の攻撃もあまり意味は無いみたいですよわたくし」

ファオラは回収したロープを体に巻きつけながら言う。

と、ガノの口が開いた。

「避ける！」

ガイの一声で、三人は左右に散る。元居た場所を一直線に水流が、振り上げられた剣のように、射線にある木や岩を両断して行った。

だが、その肺活量も尋常ではなかった。水流は、一人右側に避け
たファオラに、薙いで来たのだ。

「!？」

「ファオラ！」

ガイが叫び、デイクサはボウガンを構える。残りは通常弾と散弾
のレベル2だけだ。こんな物では、敵をのけぞらせることも出来な
い。それ以前に、射撃が間に合わない

木々を断絶しながら迫って来る水流に、ファオラ強く目を瞑った。

その時、水流が左右に分かれる様に流れる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ファオラは、僅かに水が当たるだけで、襲ってこない水流に目を
開けた。目の前には、濁流を遮るように一本の太刀が打ち立てられ
ている。

「! この剣は

」

と、その太刀に足を掛けて跳び上がる蒼い影。その姿を確認した
ファオラは、

「セル・・・・・・・・ラウト？」

その背中を見て、呟く用にそう告げた。

ハンターだな？（後書き）

新キャラ登場です。本来は先にディア戦から書く予定だったので、知り合いのリクエストにより、急遽ガノ編へ。出来れば、ラシーラ達を抜いた、セルのパーティを作りたいと思い、候補として登場させました。あ、ちなみにフアオラも知り合いのキャラだったりします。

頭 ピアス（何でも）

胴 ガレオスSレジスト

腕 フルフルSガード

腰 バサルUコート

脚 リオソウルUレジンス

これがフアオラの装備ですね。想像するよりも、作ってみた方が早いと思います。

それでは次話もよろしくお願いします。

試してみろってよ

セルは龍刀を足場にして、跳び上がると、ガノの頭に着地する。

ガノは水流を止めると、セルを振り落とそうと、頭を激しく降った。

その動作で飛ばされる前に、頭から跳び離れると、ファオラの前に降り立つ。

そして、龍刀を引き抜くと、ガノトトスに視線を向けた。

ガノはこちらに向かって大きく威嚇する。

「・・・・・・・・・・」

セルは腰を少しだけ落とし、龍刀を逆手に構えて、敵の出方を待つ。その時、

バンバン！

デイクサのボウガンが火を噴いた。更に、ガイが腹部の下に入り込むと、大剣を太刀のように振り回し、巨大な脚を斬りつける。

ガノの注意はデイクサとガイの方に向いた。

それが合図のように、セルもガノに向かって疾走する。しかし、それよりも早く、ファオラのロープがガノの首に飛んで行くと、巻き付いた。

「首を！」

その一言でセルは理解すると、そのロープをつたってガノの頭部に接近する。

「空刃」

ロープから跳び離れ、逆手に構えた龍刀をガノの首へ狙いを定めた。

だが、それを振り抜く前に、ガノの頭が消えると、反対側から巨大な尻尾が、空中に居るセルに旋回して来る。

「！？」

咄嗟に空中で体を捻るが、そのまま吹き飛ばされた。

「おいつ！」

デイクサがセルの飛んで行った先に視線を向ける。

次にガノトトスは、足下に居るガイに体を横に少しだけ引くと、力強くぶつけた。

「くっ！」

何とか大剣で防いだが、凄まじい衝撃にかなり飛ばされる。

「ガイ！」

と、今度はデイクサに水流が向かって来た。

「ぐわっ！」

まるで濁流の様なそれに飲み込まれると、しばらく流れに乗せられ、壁に叩きつけられる。

「ガイさん！ デイクサさん！」

ファオラが二人に視線を向けた瞬間、足下に水流が当たり、まるで爆発したかのように木々の木片と一緒に宙に飛ぶ。

そして、それらと一緒に地面に落ちた。

「か……か……はっ……」

落下の衝撃で思わず噎せる。ガノはファオラが生きている事を悟ると、口を開けてこちらに向けた。止めを刺す気である。

しかし、結果は予想外だった。

「！？」

突如、ガノトトスは水流の発射を中断すると、ある方向に視線を送った。

ファオラも力なくその方向を見ると、そこにはセルが立っている。頭部の鎧は吹き飛ばされた際にどこかに飛んでしまったのか、付いていなかった。だが、それ以前に、あれほどの衝撃を受けて、立つ

ている方があり得ない光景だ。

「やっぱり……あの人の言っていた事は

」

セルは龍刀を鞘に戻し、左手でそれを握っていた。そして、ガノに向かって悠然とした足どりで歩く。

ガノトトスは、そのセルに威嚇する。しかし、セルの歩みは止まらない。すると、

彼のその顔

左目の上下に目を挟んで分かれている複

雑な青い紋章が、浮かび上がった。

次の瞬間、ガノトトスの頭が縦に両断される。

「!?!」

ガノは慌ててセルから距離を取った。その頭は、両断されておらず健在のままだ。

「……今は……何……」

その光景を見たのはガノだけではなく、ファオラもそうだった。

ガノトトスは、今ので恐怖を感じたのか、慌てて海に飛び込むと、沖合に泳いで行った。

「……」

セルは無言で、ナイフを取り出すと、感情が無いかのように右掌

に突き刺す。

「　　っ！」

「！？　何をしているのですか！？」

大方回復したファオラは、慌ててセルに駆け寄った。

「・・・・・・・・大丈夫・・・・・・・・まだ、大丈夫だ・・・・・・・・」

その意味不明な言葉を聞きながら、ファオラは腕部の防具を外し、セルの手を診る。

「こんなに深く刺す必要はないでしょうに・・・・・・・・」

道具袋から、手頃な布を取り出すと、掌に巻きつけた。

「・・・・・・・・ところで、君は誰？」

セルは、ファオラを見ながら尋ねる。その顔には先ほどの紋章は消えていた。

「それは、俺達も聞きたい」

その後ろからディクサとガイが現れる。

「出来れば、あんたの事もな」

ガイはセルに視線を向けながらそう尋ねた。

「という事は、セル。お前はイーベルのハンターなんだな？」

四人が村に戻った時は、既に日が落ちていた。ガイは、村の者に一泊できる場所を貸してもらい、現在はその建物で休息をしている。

「はい。俺が来たのは数週間前です。ギルドマスターに話を通してもらえば間違いありませんよ」

「それで、なんでここにいる？ この依頼は、まだ一般に出ていないはずだが……」

「個人的な依頼です。でも、ギルドマスターの承諾は得ています」

「……まあ、少し信用できないが、あの人の紹介ならまず間違いはないか」

そう言うとガイは、セルの存在に納得した。

「次はお前だ、ファオラ」

と、今度は円状に座っているファオラの方に視線を向ける。

「わたくし私は流れハンターです」

「『旅人』か？」

「いいえ。実は、ゴールドに向かう荷車の護衛を、寝坊してしまっ

て

「

ファオラは気恥ずかしそうに視線を逸らして言う。

「ああ、でも、決して忘れていたわけではありませんよっ！唯・
．．．．．私は朝に弱くて．．．．．」

「それで独自に歩いてきたというわけですね」

セルが、自分も使った方法を彼女に聞いた。

「その通りです」

「それで、偶然ガノと戦っている俺達を見かけて加勢に入ったってところか」

「はい」

ファオラが頷くのを確認すると、ガイは疲れを吐き出す。

「お前らの事が、信用に値する人間だという事は分かった」

「それじゃあ、次は、今回の件について教えてください」

セルはガイに、今回のガノトスについて尋ねた。

「なんだ？ 依頼主から何も聞いて無いのか？」

「あ、はい」

「まったく、どんな奴だよ。お前に依頼する奴は」

ガイは一度後頭部を搔くと、仕方ないで行った風に口を開いた。

メール村周辺には、多くの飛竜が存在する。イヤンクック、ゲリヨス、リオレイア、ガノトトス。この四種類の生息が村近辺で多く確認されている。近年の報告では、姿を消す龍も現れたとの噂だ。そして、特にこの村の人々が気にかけているのが、水竜ガノトトスである。元々、漁などで食料を蓄えているメール村にとって、『海』は、最大の資源地であった。昔は、この海を支配していたガノトトスによって、ほとんど海に狩り出る者はおらず当時のメールは決定的な食糧問題に悩まされていた。

そのメール村の現状を聞きつけた、初代ゴールド王は、メールに対して食糧とハンターを派遣。しかし、メールの人々は、飛竜の倒し方を教えてくれれば、後は自分達でやるとゴールド王に告げた。それが唯一の王に対する感謝の気持ちだったのだ。

「だが、それから数百年。飛竜を、村とゴールドの為に狩り続けていたメール村の人々に、一つの災患が訪れた。近年になって発生し始めた大型飛竜の存在だ」

超重量級モンスター。

老山龍、仙高人、霸竜、崩竜。

最初の言葉は今、名の上がった規格外の大きさを所持するモンスターを意味する言葉だった。しかし、近年になり飛竜は凄まじいまでの進化と成長を遂げ、Gクラスと呼ばれるモンスターが多く現れ始めたのだ。

空を羽ばたく王者は一度の飛行力、耐久力が増し、海を蹂躪する水竜は、その体格が一層と大きくなった。

「確か、長い月日をかけて飛竜に対して有効に戦ってきた者たちに対する、進化　　ですよね？」

セルは最近になって問題とされている事を告げる。

「そうだ。これまで通用した武装はことごとく阻まれる。メールに人々にとってしてみれば、とても敵わない問題だったはずだ。しかも、それがガノトス。古い伝説を信じる老人たちは、『水神様が帰ってきた』と、眩くようになった」

「でも、神様なんてこの世に存在致しません」

横からファオラが口を挟む。

「進化するのは人類じゃない。『生物』だ」

「　　その通りだ。お前の意見はかなりの的を得ている。だが、その事は古龍観測所に任せよう。今俺達がやる事は、メール村にある『災悪』を取り除くという事だ」

その時、外に居たデイクサが中に入ってきた。

「今、エーベルから伝言が帰って来た」

その手には一枚の開いた手紙が握られている。

「それで、なんだって？」

「不足物資は半日ほどで全て届く。あの、威力が強すぎて不採用の音爆弾があっただろ？」

「ああ。あの、人間にも耳鳴りを残すやつか？」

「そいつでも、ガノの野郎が平気でいられるか、試してみろってよ」

デイクサは、次にガノトトスに会う時を想像して、楽しそうに語った。

ハロ〜

集会場。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………なあ、お譲」

「なに」

ガザンはカウンターに座っているフェニキアに声をかけた。彼女は相変わらずに本を読んだまま必要最低限の言葉で返す。

「閉店時間はとつくに過ぎているんだが……………」

と、彼女以外に誰も居ない暗い店内を見渡しながらガザンはそう告げた。

「知ってる」

「そいつは良かった。自覚はあるんだな？」

「うん」

「……………はあ」

一向に動かない様子を見ながらガザンはため息を吐く。彼女は一度決めた事は天地がひっくり返っても変わる事がない。恐らくセルが帰って来るまでここに居るつもりなのだろう。

「俺がお譲の代わりに対処しておくから、もう帰ったらどうだ？」

「嫌」

「別にお譲が気張る必要はねえだろ。まさか、帰ってこなかったら朝までここに居るつもりじゃねえだろうな？」

「そのつもり」

「お譲。正直言つてあの依頼を、あいつが成功して帰って来るのは期待しすぎだ。竜種は分かっているけど、数もサイズも未知数だ。そんな相手に正面からぶつかって勝てるとは、俺は思えない」

フェニキアはページをめくる手を止めると、

「……………そうかもしれない」

「おいおい」

その言葉にガザンは呆れて声を出した。

「でも」

と、再び本に目を移す。

「彼は何か違う」

「……………何を根拠にそう言えるんだよ」

ガザンは諦めたように、フェニキアの近くにランプを三つ置くと、店内にある他の明かりを全て消す。

「やれやれ。お譲のわがままには敵わねえな」

「ごめん」

「そこで謝られても、色々と困るんだが……………」

「ありがとう。ランプ」

「言葉が色々バラバラだな。俺はもう寝るが、毛布を持ってこようか？」

「いい」

「そうか。じゃお休み」

「お休み」

ガザンはそう告げると、奥の部屋に消えた。

夜中。暗く黒い海は不気味なほど一定のリズムを保っていた。

「真つ直ぐ漕いでください」

その暗黒の水平線を波に揺られながら一艘の小船が一つの島に向かって進んでいる。

「月明かりも無いのに良く見えるな」

ボウガンの弾を整理しながらディクサは島を明白に捉えているセルを見て声を出した。

「夜目は聞く方なんですよ」

と、セルは普通に答える。

「私も全然見えません」

ファオラも正面にあるはずの島を全く捉えられないでいた。

「俺もここまで夜目の利く人間は初めて見たぞ」

オールを左右に動かしながらガイはセルの指示道りに船を進め続ける。

ガイ達は荷物が届くと同時に夜の海に船を出した。村人の情報ではあれほど大きなガノトトスは、本土の洞窟には隠れられない。となれば、本土から一キロほど西にある島に逃げて行った可能性が高い。奴の場所と倒せる道具も揃ったが、唯一そこに行く事が出来なかった。夜の海はランブ無しでは危険が多く。逆に暗闇で強く光るモノがあればガノに気づかれる危険もある。陸地でようやく対等に

戦える相手に海上では勝ち目はない。しかし、そこでセルが名乗り出た。自分なら夜の海が見える。その言葉を最初は疑ったが、セルの眼は実際に島の位置を明白に捉えている。そこでガノの眠っているところを急襲するという作戦で島に乗り込む事にした。

岩礁波に揺られながら海岸にガイは船をつける。

一人ずつ船から降りると、近くの木に船を結びつけた。

「デイクサ、武装は完璧だな？」

「ああ、拡散弾に徹甲榴弾。貫通弾レベル3もある。仕留められねえ理由はねえよ」

大剣を背負いながらのガイの言葉に、デイクサは自慢げにそう答える。

「この島はメール村の人たちも長く訪れていない。二人一組で、ガノトトスを探そう。それほど大きくない島だが、俺達はこの地形などは全く分からない。加えて、どんな敵がいるか、もだ。探索は細心の注意を払ってくれ」

「OK」

「了解です」

「わかりました」

それぞれの返事を聞いてガイは続ける。

「俺とファオラ、セルとディクサの組で探索をしよう」

「上手くいった？」

不意に暗闇から声が聞こえた。

「誘導は成功している。それと同時に、ハンターがどのように対処して来るかも分かっていたのだが……………まさか逃げ帰って来るとは思いもしなかった」

最初に聞こえたのが女声だとすれば、次に聞こえたのは若い男の声だ。

「あり得ないわね普通なら。見たところ、大した傷も追っていないかったみたいだけど……………まさか、ゴールドに私達と同じ人種の人間が居ると？」

「それは高い確率であり得ないだろう。『龍薬』を宿している我々ならば、考えられなくはないが、それに匹敵する『力』を持つ者が存在するのは考えにくい」

その意見に、女声は考える様に黙り込む。

「考えられる理由は一つだけだ」

「……………こんな所に？ まさか

」

「どちらにせよ、俺は隊長に報告する必要があると思う。理由は
どうあれ、『蒼翼龍』『奴隸龍』『黒爪姫』のどれかが居る可能性
も考慮しなくてはならない。確率は極わずかだが……………」

「それは構わないけど、実験はどうするの？」

「それも隊長の判断を仰ぐ。俺は単独行動が認められていないか
らな」

「洞窟か……………」

ガイとファオラは斜め下に伸びている小さな入口の洞窟を見てい
た。かなり奥まで続いているようだ。

「行ってみますか？」

後ろからその様子を見ているファオラが尋ねる。

「どこかに繋がっているのかもしれない。一応調べてみるか」

「はい」

と、ガイは、太い枝を拾うに布を巻きつけて火を付け、先行して
洞窟を降りる。その後、ファオラが続いた。

「ここにガノトトスがいるのでしょうか？」

ファオラは、洞窟の中を先導して進んでいるガイに尋ねる。

「可能性はあるだろう。少なくとも、入口の繋がっている方向角度から見て、頭の高い空間に出るはずだ」

ガイは自分の考えを一通り話す。

「問題は、その地形が私達に有利になるか、どうかでございますね」

「……………」

ファオラの返答にガイは少しだけ黙り込む。

「どうかなさいましたか？」

「いや、お前の喋り方が珍しくてな。どこかのメイドか、何かだったのか？」

「そう言うわけではありませんけど……………」

「まあ、言いたくないならそれでいいが
っつと」

その時、ガイは不意に歩みを止めた。

「抜けましたか？」

「ああ、だがこれは
」

ゆっくりとガイは松明を掲げた。

明かりが周囲を明白にする。しかし、下は暗闇で見えないほど高かった。

ガイは松明を下に捨てと、ゆっくりと光の尾を引きながら落ちて行く。そしてかなり小さい点を残して止まった。

「かなり高いな。ファオラ、ロープを頼む。降りれるところまで下りてみよう」

「はい」

デイクサとセルも見つけた入口から洞窟に入っていた。難なく奥に進むと、下の方にかなり広い空間が広がっている場所に出た。

「・・・・・・・・高えな」

松明で照らしながら下までの、およその距離を見た目で判断する。

ざっと二十メートル程か。垂直じゃ無けりゃ降りられるんだがな。ロープを持ってくるべきだったか・・・・・・・・・・

「デイクサさん」

そこに、降りる通路が無いか、辺りを調べたセルが戻ってくる。

「どうだった？」

「一応下に行く道らしき通路はありました。でもちょっと問題が
.....」

「問題だと？」

セルがその通路へディクサを案内すると、

「これです」

「.....」

彼は言葉を失った。そこにあつたのは、それなりに広い空間だ。天井までの高さは三メートル程だが、それらは特に問題ない。問題は、そこに安眠するかのよう寝息を立てているフルフルの大群だった。

「飛び降りた方がマシじゃないか？」

「さすがに死んじやいますよ？」

セルは冗談を言う様にそう告げる。

「んじゃどうやって抜けるんだよ。全部倒すなんて言い出さないよな？」

「一応

これを武器と鎧に巻けば」

ディクサに見せる様に取り出したのはかなり汚れている布だった。

「なんだこれ？」

「この洞窟の匂いを染みつけておきました。元々フルフルは鋭い嗅覚に頼っている飛竜ですから、洞窟と同じ匂いを纏えば、気づかずに進めますよ。たぶん」

「それはいい作戦だな。
て言っただか？」

ん？ いま、たぶんっ

「いいえ」

「そうか。じゃ、その作戦で行こうぜ」

デイクサとセルは武器を下ろすと、用意した布を巻き始めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ロープを使い、ガイとファオラは、デイクサの組よりも先に下に降りた。そこには、突き出た岩や、海底洞窟につながっている湖など、かなりの空間が広がっていた。

そして、上からでは見えなかった大型ガノトトスが、横たわって眠っている。

ガイは声を出さずに手振りでもファオラに言いたい事を伝えた。

ファオラは無言で頷くと、岩を隠れながら進む。

そして、ある程度離れた岩に隠れた二人はようやく小さな声で会話を話した。

「どういたしますか？」

「俺達の火力では、先制攻撃はほぼ意味をなさないだろう。かと言って、デイクサ達と合流するまで待つのも危険だ」

現状では手が出せない。今、下手に気づかれればこちらの敗北は必須だ。

「……………！ ガイさん」

ファオラは少し離れた所にあつた白い岩を見つけて指さす。

「爆弾岩か？」

「なるほど……………爆弾岩を火薬で繋ぎ、洞窟ごとガノトトスを倒す気か」

別の入り口から、見降ろすように見ている黒い鎧を着た男は、ガイとファオラの様子を見下ろしながら何をしようとしているかを悟った。

「だが……………無意味だ」

そう言いながら、男は一つの鈴を取り出すと、聞こえない音を洞窟内に鳴らした。

フルフルの群を慎重に通り返けていたセルとデイクサは、突如洞窟の奥から聞こえてくるガノトトスの鳴き声に、歩みを止めた。

「今のは!?!」

「まずい」

その声が聞こえると同時に、空気振動がフルフル達を眠りから蘇らせる。

「デイクサさん! 走ってください!」

セルの声にデイクサは自分達の状況を把握し、返事をせずに走り出す。

「今のでか!?!」

「恐らく」

デイクサはフルフルの空間を走り抜ける。セルも同様に通路へと入り込むが、そこで踵を返した。

「おい! セル!」

「先に行ってください。フルフルとガノトトスの挟み撃ちなんて、冗談過ぎて笑えませんか」

「お前はどつする!？」

「ここを崩します! 恐らくガノに仕掛けたのはガイさんとファオラさんのはずです! 急いで向かってください!」

セルは龍刀を抜くと、横の壁に突き刺す。その正面から起きたフルフル達が匂いでこちらの位置を確認しているのが見えた。

「わかった! 後で絶対に合流しろよ!」

一言そう告げると、ガイは走って行く。

セルは力任せに円を書くように龍刀を上にかかす。そして一周回し斬り込みを入れると、逆手に持ちかえて切り裂く場所を定める。

「乱剣」

そう呟くと、狭い通路に関わらず、鞭の様な斬撃が、切り込みより前のラインにある岩を切り裂く。

そして、力強く地面を踏み込むと、上から岩が崩れ、見事に退路を遮断した。

「 帰りは別の道を探さないとな」

一回龍刀を回すと、慣れた動作で背中中の鞘に直す。急いでディク

サさんの所に

駆け足で通路から出ると、読み通り下の広い空間に出た。ここからでは見えないが、水しぶきが上がっている所を見ると、どうやら交戦しているようだ。

「急がないと

」

戦闘の雰囲気が含まれている場所へ歩みを進めた。その時、

「ハ口く、セ・ル

」

「!？」

咄嗟の気配に、セルは龍刀を側面へ振った。

「あ

「……………」

セルは、一瞬で反応して斬撃を繰り出した。しかし、その相手を見た瞬間、僅かに手元を動かす。

「相変わらず甘いなあ、セルは

」

マントを着た女は、斜め上の岩に付いている斬撃後を見ながら、セルへと見直した。

「ティア……………」

セルは女を見て名前を上げる。セルよりも大人びた表情をしている彼女は、頭に白い角と髪の毛のように流れる鬘の付いた鎧を付けていた。フード付きのマントだが、首から下は完全に隠れている。

「疾！」

次は躊躇いの無い横薙ぎの一閃を振るう。

「おっと」

ティアはひらりとそれを避けると、近くにある岩の上に着地した。居た位置の背後にある岩に鋭い斬撃線がつく。

「なんでここに居る！」

「フフ、まあそんなに殺気立たないですよ。こうやって話すのも二年ぶりだしさ」

その瞬間、辺りが押し付けられるような威圧感に包まれた。

「今まで何をしてたのか聞かせてよ。昔は、家族のように慕っていたじゃない」

瞬時に周囲を支配した威圧感に、セルはまるで押しつぶされるような感覚を受ける。圧倒的な存在感。生物として、自分より上位に立っている気迫。

「……………まだ、この段階で怯むの？ よほど進化が遅いのね。それとも、条件がそろってないのかしら？」

「……………」

フツと威圧が消えると、つまらないと言った雰囲気ですセルを見る。

「あ、それはそうと、貴方と一緒に消えた。『奴隷龍』『黒爪姫』はどこに居るのかしら」

「さあ。二人達とは、途中で別れた」

「……………ふーん。まあいいわ。どうせもう帰らないといけないし」

岩から跳び上がると、少し高い位置にある崖の上に着地した。

「 あ、そうそう。これだけは言っておくけど

「 顎に人差し指を当てて、何かを思い出したように振り向くと、

「 あと十年としない内に、世界は大きく変わる。人と龍でつりあっていたバランスは崩れ去り、世界は崩壊へと向かう。それまでに“進化”しておかないと、あんたも、死人の仲間入りだよ」

そう言いながら不敵な笑みを浮かべると、ティアは奥へと去って行った。

水流が勢いよく辺りを扇状に旋回する。飛び起きたガノトトスは、手がつけられないほどに暴れ回っていた。

「 下手に攻撃は出来ないな」

岩に隠れながら、突如目を覚ましたガノトトスを見ながらガイは悪態をつく。

「 ですが、隠れていても埒があきません」

隣の岩に隠れているファオラが告げる。

「 そうだな。これ以上暴れられて洞窟を崩されれば事だ」

ガイはポーチから音爆弾を取り出した。

「混乱に乗じて一機に近づくぞ。耳をふさげよ」

ピンを抜き、力強くガノトトスに投擲する。一瞬、針の様な光が出る。次の瞬間、爆発の様な炸裂音が、周囲を襲った。

「っ……!!」

あまりの音に、ファオラは耳を強くふさぐ。湖に居る魚は全て死に耐え、ランゴスタやカンタロスと言う、大型昆虫は全て粉々に砕けた。上から氷柱の様に尖った岩が次々と落下してくる。そして狙いだったガノトトスは目を回したようによろよろと倒れていた。

「さすがに効いたな！ 行くぞファオラ！」

ガイは彼女に聞こえる様に大声で言う。

「ダメです……世界が揺れています……」

ファオラもあまりの音に、フラフラとしている。

「ガイ！ 洞窟内は反響がひどいぞ！」

そこに合流したデイクサは、まだ回復しないガノトトスに向かって徹甲榴弾レベル2を放った。時間を置いて爆発すると大きく仰け反った。

「デイクサ！ セルは!？」

装填作業を行っているデイクサにガイが尋ねる。

「話せば長いが、後で必ず追いつくと言っていた」

「とりあえず、今の内に奴を叩くぞ！ ファオラ、お前は回復するまで休んでいろ」

ガイは的確にそう指示を出すと、今だにヨロヨロしているガノトスに走って行った。

ガイの投げた音爆弾は、思いのほか強力だった。

自分達はどれほどのモノか知っていた為、すぐさま行動に移せたが、ガノトスにとっては予想以上だったようだ。未だに混乱し、あちらこちらに水流を乱射していた。

「くそ！ 無茶苦茶撃ちやがって！」

デイクサの乗っている岩を水流が粉々にする。瓦礫に巻き込まれないように、地面へと飛び離れた。そして着地と同時に拡散弾を放つ。着弾時に炸裂した三つの弾がガノの周辺で弾ける。

僅かに屈むように怯む。その隙に、ガイは跳び上がり、頭上まで接近すると、大剣を頭部へと振り下ろす。

「オオオオ！！！」

力強く刃を入れるが、僅かな鱗の抵抗もあり、ほとんど通らない。

「チツ」

ガノが振り払おうと頭を振る。ガイは吹き飛ばされる前に頭を足場にして距離を取った。

「大丈夫か？」

デイクサがガイに走り寄る。

「ああ。だが、混乱しているとはいえ手が付けられん」

「もう一つ使うか？」

「……そうだな。とっても使い道がない。ファオラ！」

どこかに隠れている彼女に聞こえるように声を張り上げた。

「もう一つ使う！ 耳を塞げ！」

言葉と同時に投げられた音爆弾は、ガノトトスに向かって飛来する。

爆発する前に二人は少しでも音の直撃を避けるために岩に隠れた。

一つ目と同じように、僅かに光が漏れると、とてつもない轟音と、音圧が洞窟内に響く。

「くっ」

「っ……………」

ガイとデイクサは必死に耳を押さえる。天井から更に多くの岩が落下し、壁の亀裂が広がっていく。

音が伝わり終わると、少しだけ静かになっていた。

「……………ガノは？」

ガイは慎重に岩陰から顔を出して尋ねる。

「……………まだ立ってやがる」

ガノトトスは健在だった。あれほどの威力のある音爆弾を二度も喰らって、立っているとは想像を絶する怪物だ。

「なんて奴だ。これ程の物とは」

あまりの現実。今まで有効だった道具はすべて使えない。竜がこれほど進化している。これ程のモノが、数多く向かってきた場合、一体どうすれば、人間は竜に対抗する事が出来る？

その時、ピシッと嫌な音が聞こえた。

「……………おい。ガイ」

「……………なんだ？」

「今の音は、何だ？」

デイクサの言葉に合わせるように、音は次々と広がっていく。

「まさか………崩れる」

次の瞬間、岩肌が音を立って崩れ始めた。

「マジか」

「急いで脱出するぞ！」

岩陰から飛び出すと、ファオラが隠れている場所に移動する。

「ファオラ、洞窟が崩れる。脱出するぞ！」

「あ、は、はい………」

と、未だにフラフラしながら立ち上がった。その彼女にガイは肩を貸すと、

「！ ガイ！ 隠れる！」

言葉に反応し、慌てて岩陰に隠れる。すると、そこを狙う様に、水流が襲いかかった。

「くそっ！」

何とか岩で水流は遮断される。

「じいっ！」

違う所に隠れているデイクサは、ガノに向かって拡散弾を撃つ。しかし、落下して来る岩に阻まれ、うまく当たらなかった。

「くそっ！ 当たらない」

どうする……………。全員無事に脱出するには、どうすればいい……………

未だに水流から身を隠しているガイとファオラを見て、デイクサは考えた。

その時、三人の頭上を何かが通り過ぎて行く。

「!？」

「なに!？」

通り過ぎて行ったモノを見て、二人は啞然とした。飛んで行った飛翔物は、自分達よりもはるかに大きい岩だったのだ。

飛んできた巨岩は、降って来る岩をはじきながら、ガノトトスに当たると、水流の軌道を大きく変える。

「大丈夫ですか!？」

後ろから三人を見つけたセルが駆け寄って来た。

「セル！ ナイスタイミングだぜ！」

デイクサはボウガンを背負うと、ガイたちに駆け寄る。

「無事か？」

「ああ。それよりも急いで脱出するぞ」

「出口なら、ここから西の方に、風が流れている通路がありましたよ」

発見した脱出の情報を伝えた。

「出口だ。急いで向かうぞ」

視野に場所を確認すると、そこへ向かって移動を始める。

だが、その時ガノトスが復活した。自分も危険だと言うのに、進路を遮るように水流を発射して来る。

「くそっ！ いい加減に寝てろってんだ」

咄嗟に岩陰に隠れながらデイクサが悪態を付く。辺りにさらに大きな岩が次々と落ちて来た。

「まずい、時間がない……………」

「……………ガイさん、デイクサさん、俺が囨になります。その間に脱出してください」

「何を言っている？ そんな事が出来るわけがないだろ！」

突然のセルの提案にガイは強く反論した。この場に残ると言う事は、死を選ぶのと同じだ。

「ですが、このままでは全滅です。最短ルートで出口に向かわないと、時間をかけてしまつたら、全員生き埋めになります！」

「だからと言って、一人だけ残して行く訳にはいかない。勇気と自己犠牲は違うものだ！」

「自己犠牲なんかじゃありませんよ。全員が生きて帰るには、これしかないと思つたからですよ」

彼から放たれた言葉は、決してこれから死ぬ者の言葉ではなかった。まさか、本気で生きて帰れると思つているのか？ この地獄の様な窮地から……

「ガイ、セルに任せてみよう。口論の余裕はもう無いぞ」

「

「……………分かつた。セル、すまないが頼む」

その言葉に、セルは笑みを浮かべて、

「任せてください。俺は、このくらいしか役に立ちませんから」

「

背中から龍刀を抜いて、ガノトトスを見る。

「セルさん、気を付けてください」

ガイの肩につかまっているファオラは、彼を見て告げた。

そんな彼女に、言葉ではなく笑顔で答える。

「同時に行くぞ

」

一、二の三！ と言う合図で四人は分かれて岩陰から飛び出した。

その四人をガノは視覚で捉えると、ガイ達の方に視線を向け水流を溜める。だが、

「!?!」

無視できない殺気を感じて、横を振り向いた。

「そうだ、こっちがお前の相手だ!」

セルは龍刀を抜きながらガノトトスへと身構えた。

あれは

生存本能。

それはハンターと飛竜の間で唯一同じ意味として使われる言葉である。

飛竜も意味なくハンターと対峙する訳では無い。自らの縄張りを侵したハンターを外敵として駆除するのは当然の習わしである。しかし、ハンターも意味もなく飛竜の縄張りなどに近づくはずもない。この世で最も危険なモノは飛竜に他ならないからだ。

命を賭してまで飛竜と戦う理由はハンター個々であるが、どのような状況下でも、決して一人では飛竜に打ち勝つのは不可能だった。竜と人間の力を平等にしたのはそこだったのかもしれない。竜よりも遥かに個々の能力で劣る人間は、知力を使う事によってこれまでの歴史を互角に生き抜いてきた。

本能的な生存能力では竜が大きく勝るが、知性的な生存本能は人間が勝ると断言しても良いだろう。だからこそ、人は竜と互角以上に戦い抜いている。

しかし、竜も生き物である以上、今まで以上の脅威が現れれば進化する。それは純粋な生存本能より生み出される、竜達の生きる方法だ。

そうして竜は進化した。

と言つても、新たに擬態能力が付くわけでもなく、翼が増えて飛行能力が増すわけでもない。ただ純粹に巨大化するだけで、これまで押されてきた時を平等へ戻したのだ。

それこそが、純粹な本能のみで進化してきた竜の進化にふさわしいだろう。だが、現在ガノトトスの目の前に居る人間はそれらと互角か、それ以上の能力を持っている。

ガノトトスは水流を吐きだした。狙いは無論セルである。彼はその場から跳び上がり、ガノの頭上に跳躍する。

「空刃

」

セルは太刀を振り上げ、頭部を狙う。どれほどの巨体であろうと、頭と胴を切り離して生きていられる生物は存在しない。

しかしガノは、そのセルに喰らいつくように口を大きく開いた。次の瞬間、水流が真上に向かって発射される。

「!？ くっ

」

直前に、技を停止する。威力は申し分ないのだが、刃を通すまでの時間がかかるのが欠点だ。落下していく岩に龍刀を突き刺すと、紐を引き強制的に位置を変えた。

水流は、真上の岩を砕く。セルは着地すると一瞬だけ出口に視線を向けた。岩によって塞がれて通れなくなっているが、三人は無事に通過したようだ。

視線を戻す前に正面から気配がした。見ると、ガノの大口が目の

前に迫っている。

「っと

」

羅列に並ぶ鋭利な歯を上に乗って回避した。通常ではあまりの大きさに喰われることは必須だろう。しかしセルは、顎の範囲を上回る高さに跳躍している。

ガノは瞬時に頭を引くと、宙で身動きの取れないセルを狙って水流を発射した。

先ほどの様な高い場所ならば回避は困難だが、今は地面が近い。

地面に龍刀を突き刺し、真下に身体を引き寄せて回避する。水流は上に外れ、セルは顎の下に龍刀を突き刺した。

龍刀の、峰は折り返しになっており、突き刺したモノから簡単に抜けないようになっていた。左右にある岩の壁に太刀を振り回すように、頭部を力まかせに叩きつける。

すると、龍刀は顎から抜け、ガノは再びセルに喰らいついた。それを読んでいたかのように屈んでやり過ぎすと、戻っていく顎に再び龍刀を突き刺し、今度は頭の上に登る。そして、体のあちこちに携帯しているナイフの一つを抜くと、眼に向かって突き刺した。

「!?!」

激痛の断末魔が洞窟に響く。セルは振り落とされる前に跳び下りると、龍刀を引き寄せた。

・・・・・・・・・・そろそろ限界かな・・・・・・・・

洞窟の崩壊状況を見ながら、これ以上の交戦は危険と判断した。

近くの崩れて来た岩に龍刀を突き刺すと、ガノトトスに投擲する。

片目の見えなくなっているガノにそれはヒットすると、セルはその隙に股下を通り抜け、湖に飛び込んだ。

恐らく、ここはガノトトスが洞窟に入って来るための通路だ。なら、外の海に繋がっているはず

なるべく息を吸い込まずに、スイスイと奥へ進む。暗い海はほとんど何も見えないに等しいが、僅かに見えている外の光を頼りに進み続ける。

その時、背後から向かって来る気配に、後ろを振り向く。

・・・・・・・・・・簡単には逃がしてくれないか・・・・・・・・

後方からガノトトスが凄まじい勢いで迫って来る。流石は水竜と言ったところか。

セルはゆっくり龍刀を抜くと、攻撃に備えた。

ガノトトスが大口を開けてセルに迫る。水流の使えない水中では、攻撃パターンはただ一つだ。

高速で迫る大口を、体をひねって間一髪で回避する。同時に背ビレに掴まると、その付近にナイフを突きたてて状況を安定させた。

速すぎて反撃が出来ない。一度でも止まれば、何とかなるのだが

ガノトトスは、斜めに浮上を始めると、トビウオの様に海中から跳び上がった。

「しまっ

」

一瞬判断が遅れ、空中に投げ出される。

そのセルに向かって、ガノは口を開くとそのまま丸飲みにして口を閉じた。

海に近い森。

高く切り立った崖の一番下が、内側から爆発するように吹き飛んだ。

「開いたな

」

その中から声が聞こえ、ディクサを先頭にファオラを担いだガイの三人が外に出る。

「助かりましたね」

「ああ。洞窟は完全に崩れたな。セルは大丈夫か………

」

残してきた彼の事を心配して、出て来た穴に視線を送る。

「大丈夫だつて。あれほどの自身があつたんだ。今頃外に出てるさ」

と、デイクサは徹甲榴弾を装填しながら言った。

「ガイさん、もう大丈夫です。すみませんでした」

ファオラは肩を借りていたガイに礼を言う。

「気にするな。ゴールドに仲間を見捨てる奴はいない」

「て、言うか、騎士の志だからな。それ」

その時、前方の海面がゆっくりと盛り上がって来る。

「お、セルか？」

デイクサが視線を向けると、海中からガノトトスが飛び出してきた。

「!？」

三人は同時に己の武器を構える。

「こいつが居るってことは……」

「……………くっ」

「セルさん……………まさか……………」

ガノは三人に威嚇をした。片眼が潰れている。どうやらセルがやっただようだ。

「……………デイクサ、あと徹甲榴弾は何発だ？」

「残念な話、後一発だ。拡散はゼロ。脱出で穴を開けながら進むのに結構使っちゃったからな……………」

額から汗が流れる。

「でも、私達は絶対に生き延びないと……………セルさんの意思が無駄になってしまいます！」

ファオラの言葉に、二人は武器を握り直す。

「そうだ。その通りだ」

「一つかましてやるぜ！」

身構えた三人にガノが攻撃をしようとした時、

「……」

ガノ動きが止まった。正確には、小刻みに震えている。

「……………なんだ？」

攻撃してこない様子に、三人は様子をうかがう。

そして、ガノは苦しそうに暴れ出した。

「離れるぞ。危険だ！」

三人は即座にガノから距離をとる。本人は未だに体をねじるように暴れていた。

「なんですか？ 一体どう言う事？」

あまりの状況に、理解に苦しむ三人。

その時、ガノトトスの腹部に内側から刃物のようなモノが突き出て来た。

「！ あれは

」

ソレは、腹を裂くように後ろに動くと、そこから大量の血と臓物が流れ出てくる。

「な、なんだ

」

ガノトトスは、苦しそうに倒れこむと、そのまま絶命した。

そして、内側から斬り開くように龍刀を持ったセルが、血まみれで脱出する。

「！ セル！」

その彼に三人は慌てて駆け寄った。

「・・・・・・・・・・まだ生きてる」

セルは頭部の防具をとって夜空を見上げてそう告げると、次に走って来る仲間に向かって笑顔を作った。

「ほう・・・・・・・・・・誘導は成功か」

「報告書によるとそのようです。しかし、制御下に置く事は、異なる音程が必要である結果になりました」

「ふむ、『奴隷龍』を欠いたのは痛いな。だが、実験は最終段階。ゴルドの『塔』には、貴重すぎる文献が残っているとの情報もある。それに、“歌声”の事も気になる」

「・・・・・・・・・・なるほど、“歌声”ですか・・・・・・・・・・」

「的を得ている名だろう。これも確実に手に入れなくてはならない」

「では、『十頭の龍』を？」

「そうだな。『塔』には『死神龍』を彼は銀に由縁がある。『雷麟姫』とクローズは、引き続き周辺の調査をさせよう」

「では、そのように手配します。“歌声”はどうしますか？」

「探査、調査、共に『一刃龍』に一任する」

「あの、戦闘狂にですか？」

「奴が最適だ。ゴルドは、自らの知識で過去の災悪を乗り越えて来たという。ならば、“歌声”の奪取も、僅かながらに交戦する可能性がある。確実な遂行は、奴が適任だ」

「『一刃龍』は、数日前に『土砂竜』を倒し、帰還しています。初見の相手だったので、代償は大きかったようですが……」

「流石だな。あれを一回で倒すとは……いや、一撃かな……彼の条件は『十頭の龍』で最強の部類に入る」

「鎧は修理中です。万全な状態は、数か月かかると」

「結構だ。彼が了承次第、決行を始めさせてくれ。何事も万全にこしたことはない」

「あー、疲れた……」

早朝に近い真夜中。深夜よりは明るくなってきているイーベルの馬車乗り場に、ガイ、デイクサ、ファオラ、セルの姿があった。

「確かに………割に合わない任務だったな」

伸びをしながら欠伸をするディクサにガイが言う。

「んなことより、さっさと組長に報告して、寝る！」

ガシャッとボウガンを担ぐと、叫ぶように告げる。

「俺も隊長に報告するか。ファオラ、お前はどつする？」

「ん〜、正直、今夜一晩過ごせる場所があればいいんですけど………。とりあえず、どこかベンチで寝ます」

「そんなんなら、組長に空いてる部屋がないか聞いてやるうか？」

ディクサが提案する。あの人は、この時間帯は起きている事が多い。

「いいんですか？ 私、遠慮はしませんよ？」

「かまいやしねえよ。数週間前の『レウス事件』で、空いた部屋がいくつか出来ちまったからな………」

何か、嫌な事を思い出すようにディクサは語る。

「？」

「まあ、それが一番だろう。助けてもらったわけだしな。一晩くらいなら、何とかなる」

「じゃあ、遠慮しません」

ファオラは嬉しそうに提案を受けた。

「セル、俺達はもう行くが、お前も帰るのか？」

デイクサは、馬車から鎧を下ろしている彼に尋ねる。

「……………」

「おい、セル……………おい！」

まるで聞こえていないような様子に、肩に手を乗せた。

「？ デイクサさん。どうかしましたか？」

「なんだ、聞こえて無かったのか？」

「あ、すみません」

「俺達はもう帰る。お前はどつするんだ？」

「俺も宿に帰りますよ。さすがに集会場は開いていないと思いま
すし」

「そうか。また組む事があつたら、そんな時はよろしくな」

「はい」

そう言い残し、三人は賑やかに話しながら馬車乗り場から去って行った。

「……………俺も早く帰って寝よう」

鎧の頭と胸部を龍刀にひっかけて、静かな街の中を宿に向かって歩き出す。

昼間の賑やかな雰囲気とは裏腹に、静かな街と言つのも悪くはない。人がいれば、それだけ警戒する神経を強く使う。

「……………ん？」

ふと、集会場の前を通り過ぎようとした時、中で光る僅かな明りに気がつく。

マスターが起きてるのかな？

ドアに手をかけ、扉を開けると、三つのランプの中心のカウンターに、一人の女性が両腕を枕にして眠っていた。

「……………」

まさか、待っていてくれたのかな

セルは落ちている毛布をフェニキアにかける。その時、

「!？」

世界が曲がるように、視界がひどく揺らいだ。同時に強烈な眠気

に襲われる。

「……………くっ……………回復が……………始まったか……………」

眼を抑えるように腕で覆うと、壁に背をつけて座り込む。心臓が早い。全身の細胞が狂ったように活動を始める。その顔に青い紋章が浮かび上がって来た。

額を押えながら眼を閉じると、力尽きたように眠り始めた。

なんだこの報告書は！

「ったく、なんだこの報告書は！ふざけてんのか！？」

エーベル衛兵団本部。平地の敷地に造られた五つの建物によって構成されている。衛兵団本部は、東西南北の位置とその中央に建物が建てられており、南に後方射撃大隊本部、北にエーベルが行き届く村やその他に被害を出している飛竜の討伐状況などを判断、調査し、街にいるハンターたちに“依頼”として配布する。

エーベル衛兵団後方射撃隊隊長

ヤミガラスは、山

済みに積まれた報告書の中から、デイクサが行ったメール村の調査結果を見て怒鳴り声を上げた。

「どうしました？ 隊長

」

その様子に、声をかけた男に分厚い本が投げつけられる。顔面にまともに食らった男は鼻血を噴きながら床に倒れた。

「組長と呼ばんかい！」

再び怒気を含ませてそう言う。

組長と呼べ！

エーベル衛兵団射撃大隊に所属した者に、最初に告げる言葉はそれである。彼女、ヤミガラス・ケイミは、右眼を縦に通る傷が特徴の二十代後半の小柄な女だ。男女問わず、本気で睨まれればどんな

人間でも竦んでしまう程の雰囲気と鋭い視線を持ち、過去の古龍との戦いで片腕を失っていた。部下には自分の事を組長と呼ばせている。

「おいっ！ デイクサの野郎はどこだ!？」

部屋全体に響き渡る程の声は、その答えを知っている者に届いた。

「デイクサさんなら、休憩をとってますけど

」

「バン！ 奴を叩き起こして来い！ 聞きたい事がある!！」

依頼整理を終え、武器を研いでいたバンは立ち上がると、

「分かりました」

否定することなく、そう言い部屋を後にした。

「……………おい。てめえら！ なに手を休めてやがる！ さっさと仕事しろ！ セレク！ テメエはなに寝てやがる!？」

「……………いや……………隊長の投げた辞書が……………」

「組長と呼ばんかい!！」

男にもう一冊辞書が飛来した。

殺風景な真っ白い世界だった。

空も、地面も、景色も、全てが白と言う無の世界。セルはその世界の中に立っていた。

「……………またですか」

呆れたように声を出すと、何気なく視線を向けた先には、二つの眼がこちらを見ている。不気味に“眼”だけの存在は言葉を放ち始めた。

“ようやく、夢を見たか……………”

「夢は見ないつもりだったんですけど……………何故ですかね」

“望んだからだ。少なくとも、望み無しで現れるモノでは無いと知っているだろう？”

「いいえ。知りたくもないです」

“力の根源。人の限界。進化する種。自らで死を選ばない限りは、また会う事になるだろう”

「二度と会いたくないですよ」

“どうかな？ 奴も言っていただろう、世界が終ると

”

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

“それとも、そんな事をいちいち真に受けている事は無いとでも？”

「・・・・・・・・・・・・・・・・彼女はそんな人ではありません」

“だが、奴らなら間違いなくやる。その為に存在する者達だ。意味の無いモノなど、“死”と同じ。よく分かっているはずだ。もう、終わりが近いことは”

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

セルが目を覚ますと、集会場の長椅子の上に身体が乗っていた。

「　　っと、おっ！」

バランスを崩し、少し高さのある床へと落下する。

「痛たた・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ、ようやく起きたんですか。ハンターさん。もうすぐ開店ですから外に出て待っててください」

カウンターの向こう側から聞こえるリトウの声に、セルは身体を起こしながら辺りを見回した。フェニキアさんは、さすがに帰ったのか

起き上がる際に、自分に絡んでいる毛布の存在に気がつく。

これって……………

確か、自分が彼女に掛けた物だ。何で自分にかかっているんだらう？

「そいつはお譲が駆けていったんだ」

背後からガザンの声が聞こえる。

「フェニキアさんがですか？」

「ああ。開店ぎりぎりまでお前を起こさなかったのは、お譲の頼みでもあったからな」

「……………なんで？」

「さあ、俺に聞くなよ。それに起きたならさっさと外に出る。準備の邪魔だ」

シッシツと手を振るガザンに一度、すみませんと言つと、道具を持ち集会場を出た。

「ガイ、ちょっといいかしら？」

二人一部屋の自室のベッドで、本を読んでいたガイが視界を上げると、そこには自分の上官が立っていた。

「コウト隊長？ 一体どうしたんですか

」

本を閉じて立ち上がり、失礼のないように服装を整える。地面に届くほど長い後ろ髪を、三つ編みにし、眼鏡をかけている知的な雰囲気のある女
前線近接大隊隊長、コウト・ミルは
ガイの姿勢が整ってから話を進めた。

「貴方の報告書が気になってね」

コウトは、渡されていた報告書をガイに手渡す。

「それは、今までゴールドで記録されているガノトスの全長を遥かにしのぐ情報よ。貴方の報告を疑うわけではないのだけれど……一応、実際見た貴方の意見を聞いておきたいね」

昨夜の戦いが記憶から蘇る。あれは間違いなく自分とデイクサ、ファオラだけでは勝つのは不可能だっただろう。今考えてみれば何故あの時、ガノトスを追撃する気になったのか分からない。

「……間違いありませんよ。脚の長さは三メートル以上。そこから測れば、大体の大きさは二百メートル以上だと思います」

「・・・・・・・・・・信じがたいわね」

「自分は接近タイプですから、足の大きさと体までの股下を見れば、大体の大きさは把握できます。なにせ、大剣が腹部にとどかなかつたんですから」

化け物、と呼ぶに値する飛竜だった。今回が調査ではなく防衛戦だった場合、一体どれほどの被害を出しただろう。

「『レウス事件』といい、飛竜に関するモノで異常なモノが多くなってきてるわ・・・・・・・・・・」

「そう言えば、新しい竜が確認されたとか」

彼女の一言にとある情報を思い出す。

「ドンドルマの方で正式に決まったようよ。『土砂竜』ってね」

「想像もしたくありませんよ」

名前からしてやばい竜種である事は容易に想像できる。

「たぶん、ゴールド付近は昔ながらの飛竜が多いからね。こっちはまだ大丈夫だと思うけど、対処法は考えておかないと」

コウトは一通り話すと踵を返して歩き出す。

「邪魔してごめんね。また何かあったら呼ぶわ」

そう言うと、いつの間にか持っている報告書をピラピラさせなが

ら去っていった。

「ふう、疲れたなあ……………」

セルは宿に戻ると、扉を開けてロビーに入った。中は昼間にもか
かわらず明るさを保つために至る所にランタンが置かれている。

「お帰り」

そこへカウンターでリストの整理をしているクルクトが、話しか
けて来る。

「あ、どうも。部屋、直りましたか？」

「綺麗に直してもらったよ。ほとんど半壊だったからねえ。丸一
日かかったけど、生活できるようになってるよ」

「ありがとうございます」

「それと、君に伝言がある」

一度カウンターの下に手を伸ばすと、そこから、伝言？ と首を
かしげているセルに一枚の手紙を差し出す。

「手紙……………ですか？」

「帰ってきたら渡してほしいって頼まれてね。綺麗なお嬢さんだったよ」

セルは礼を言うと、渡された手紙を見ながら、部屋に上がって行った。

エーベル中央区部公園。

公園の中央にある噴水から流れる水の音。木々の根元に影のかかるように造られたベンチ。子供のはしゃぐ声や、小鳥の囀る声など、平和な日常そのものが存在していた。

数あるベンチの一つに、腰を下ろし本を静かに読んでいるフェニキア・シャムールは、ある尋ね人が来るのを景色と同化するような自然さで待つてる。いつもは集会場に行く時間なのだが、個人的な用があるのは彼の方だ。伝言は残してきたし。たぶん・・・彼は来る。

そんな彼女にひらひらと一頭の蝶が舞い飛んでくる。蝶は読んでいる本の先端に止まると羽を休ませた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

フェニキアは、目の前に居る蝶にじっと視線を定めた。すると蝶は羽を動かすと、何処へ去って行く。

「フェニキアさん

、だよな？」

蝶と入れ替わるように、現れたセルは間違いのないように尋ねた。

「依頼………終わった？」

本を閉じて彼女が聞いてくる。本を読んでいる所を邪魔したかなあ。と思いつつも尋ねられた手前、それに合わせた返答を返す。

「ああ……うん。これ。一応マスター承認の印を押してもらったから」

小さく折り畳んだ依頼書をフェニキアへ渡す。水中に入った為、濡れた跡が良く分かる一枚。

「………ありがとう」

依頼書を見ながら、唐突に礼を告げてくる。

「あ……いや。助かったのは俺の方だよ」

「でも、危険だった。もっと良く考えれば分かったのに………」

不思議と彼女は自身を責めるように表情を落とした。あれ、なんか俺、悪いこと言ったかな……。セルも多少困惑する。

「……ごめんなさい。報酬はいくらでもいい。貴方の好きな値段を言って」

巨大なガノトトス。通常サイズを遥かにしのぐGクラスの飛竜を自分に当ててしまった事に、彼女は責任を感じているようだ。確かに、アレは自分でなければ死んでいる依頼だ。エーベルに無事帰って来たことを彼女は奇跡だと思っている。だが、自分でなければ更なる被害を出していた事も一つの事実だ。

「じゃあ、朝ごはん代分をもらおうかな」

お金で解決できる問題ではないと分かっていた。死んでいてもおかしくなかった依頼を、当てられて怒らない人間など存在しない。ハンターと言うのはそういう職業だ。しかし、彼女の前に立つ彼の言葉には、そういった雰囲気を感じさせない口調だった。本心で、ありがとう、と言わんばかりの口調だ。

「俺は、動いたら動いた分だけエネルギーを消費する体質で、昨日の夜は特にね。さつきから何か食べたくて正直キツかった。だから、俺が食べた分だけ払ってくれるならそれでいいよ」

「……」
わかった。じゃあ、

集会場行こう」

「うん。そうしよう」

「酷いねえ」

大地を焼き、地面を分解し続けている太陽。昼夜の温度差により、どの自然界よりも厳しい世界。

砂漠。肌色の海が広がる広大なその場所は、別名 大砂界とも呼ばれている。

エーベルから現地へとヤミガラスの命により赴いた、ライナとケインは重症で運ばれていくハンター達を後ろに、戦闘現場を見直していた。

辺りは何の変哲もない、ただの砂地獄だ。一部を見せて埋まっている岩肌以外に、気になるところは特に無い。しかし、確実にそして的確に二人の眼を引いている一つの“大穴”は決して見逃せるものではなかった。

「ケイン。これどう思う?」

直径八メートルは超える奈落に続いていそうな大穴は、人の造れるものでなければ自然にできるモノでもない。

「ディアブロス……………だな……………」

照りつける日差しが、街の数倍も強いに関わらず、二人は全身鎧をまとっていた。

「一体どこの誰よ。この依頼を正当化した奴は!？」

暑さで苛立っているのか、涼しそうな大穴を見ながら叫ぶように立ち上がる。

「……………。当時は普通サイズだったようだな……………。ここ半年で劇的に巨大化している……………」

「エーベルで上位ランクのハンターが四人もやられたのよ!? 組長に調査と依頼の申請を要求しないと……………ああ! めんどくさい!」

「……………。そっちは俺がやる。問題は……………すぐにそれが申請されるかどうか……………」

「それまでは仕方ないわ。星12で危険指定にしておきましょう。それにしても保護指定の飛竜がまさかここまで進化しているとは

「

岩肌の上から、真下の“大穴”を見下ろしている者が存在した。

全身をまるで火山が人の形を象つたような赤い鎧で全身を覆い、その上から砂塵防止のマントを羽織っている。その背中には牙の様な形をした黒い双剣 超滅一紋を携えていた。

「優秀だな。流石はゴルドの兵士。敬意に値する」

その者は重厚な雰囲気を含む口調で、作業を終え帰っていく衛兵団達を評価するように見る。

「
だが、それでは甘い。真の龍は彼らの上空へと迫
っている」

「
.....」

「どうかした？」

警戒心の強いケインは一つの岩肌の上を一度見て、視線をそらし
た。見ていた場所をライナも数秒確認した後、再び尋ねる。

「なんかいた？」

「.....気のせいだ.....」

「.....まあ、あなたの偏屈には慣れてるわ。重傷者、積み
終わったらさっさとエーベルに帰る!」

全員の肯定を聞いて、彼らはその場を後にした。

二日三日で終わりそうな依頼じゃないな……………

二日後。

「あ……………しまつた……………」

集会場の依頼掲示板の前。セルはここに来て初めて来た時の事を思い出した。この依頼は競争制で、早い者から順に依頼を受けられる。たまたま寝坊したセルは、目の前に一枚もない無残な掲示板を見て呆けながら後悔していた。

「あーあ。また仕事無いんだ。ハンターさん」

一通り息の付いた店内で、台を拭いているリトウは面白そうに告げる。

「不覚にもこのルールを忘れてましたよ……………」

ゴルドは他の国と違って、自給自足の独立国家である。日常的な依頼がほとんどで、その他は自然界内にある集落などからの掃討依頼が大半だった。加えて、優秀なハンターが数多く、依頼のほとんどは一度での達成が多い。依頼不足など日常茶飯事だった。

はあー。と、カウンターの席に腰を下ろす。一番奥の席で本を読んでいるフェニキアの姿も既に日常的だった。

「まあ、遅れた奴が悪い」

ガゼンは煙草を吹かしながら、飛んでくる鷹の定期連絡を整理し

ている。

「……………ガザン」

一度セルに視線を送ったフェニキアはガザンを見た。

「残念ながら、正真正銘、嘘偽りなく、頼める依頼は零だ」

「そう……………」

「なさけないねえ

ハンターさん」

バサバサと鷹が窓から入ってきた。ガザンは手袋をはめた左腕で足場をつくると、水と餌のある宿り木に乗せる。その足にくくりつけられている小さな筒を取り外すと、中で丸まっている小さなメモを開いた。

内容を確認する。そしてやれやれと言う風に、

「ラウト、運が良かったな。ちょうど依頼が一つ空いた」

「本当ですか!？」

「ほれ」

一枚の茶色の依頼用紙。そこには一匹の飛竜の捕獲権利が載せられている。

「紅いディアブロスですか？」

「別名、ディアソルテ。砂漠の果てにあるノト村近辺で被害を出している角竜だ」

「……暑い天気だな」

遮る物のない砂漠を貫く直射日光。それが地面の砂礫と組み合わせ、さつて凄まじい温度を記録していた。

大砂界。素晴らしいまでに広がった砂場風景は、岩山の目印がなければ迷ってしまいそうなほどに同じ風景の繰り返しだ。国の何百倍もの広さを持つこの砂漠は、世界の至る所へつながっており、飛竜さえ注意していれば最短距離でどんな場所へも向かう事が出来る。しかし、豊富な砂漠の知識がなければ、熱気と飛竜でたちまち息絶えてしまう程の危険地帯でもある。

その危険地帯の入り口で馬車を下ろされたセルは、南東から岩山に向かい、北側に抜けた先にあるノト村を目指して歩いて行く。

紅いディアブロス

ディアブロスとは目の上に曲がった二本の角を保持する飛竜だ。角や牙など、攻撃的な部位を数多く持つが、意外と草食性である事が判明している。発達した前脚で地面にもぐり、地中からの奇襲や逃走に使う場面が多い。飛竜種特有の翼も所持しているが、飛行による移動はほとんど使われない。砂中を潜行する際は音を頼りに移

動することから聴覚も発達していると考えられている。

「原種の甲殻は土色が基準だが、繁殖期に入る雌の甲殻は、俗に“警告色”と言われ黒ずんだ色へと変貌する。この状態の雌は非常に凶暴であるため、ギルドの方では『亜種』として処理される。」

セルが担った依頼はそういったディアブロス達ではなく、その中でも突然変異と言われている、紅い甲殻を持つ角竜を捕獲することが今回の仕事であった。

「紅い甲殻を持つディアソルテは世界でもほとんど確認されておらず、数が少ない。今回は捕獲が最優先、周りに危険と判断できるほどの状況ならば討伐という事になっている。ただし討伐した場合は、報酬は半分と依頼書には記載されていた。」

「にしても

」

「縄張りがあるとはいえ、こんな広い砂漠で見つけるのはかなりの作業だ。とりあえずは、目撃情報がある村の方へ情報を収集する方が最優先だろう。」

「そんなこんなで、ようやく岩場に到達したところで夜になってしまった。」

「二日三日で終わりそうな依頼じゃないな……………」

岩山の開けた空間で、辺りから乾燥した枯れ木を焚火代わりに拝借。火を付けて猛獣避けの焚火に仕上げた。

「岩山もだいたい先へ進んだ。ここからノト村へはそう遠くないはず。」

真夜中にたどりついても迷惑であると考え、朝まで休む事にしたのだ。休むと言っても睡眠を取る訳ではない。フィールドは危険だ。いつ寝込みを襲われるかわからない、竜と人の戦場である。自分以外に信用できる人間がいるのなら交替で仮眠を取るのも手だが、一人である為なるべく起きておかなくてはならない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

パチパチと炎が木を灰にする音が響く。

現在の状況は旅をしていた時は多く、その度に師に教えを受けていた時の事が毎回のように頭をよぎる。

いいか？ セル。この世界はとても住みにくい。人が安全に生きるためには、とても多くの時間と大きな犠牲が必要だった。数ある時の中で人間は進化し、飛竜に対して自由を主張した。

主張・・・・・・・・？

なに。深い意味はない。正面から一匹の龍に戦いを挑んだ。

？ それだけ？

ああ。そうだ。ただそれだけだ。だが、その今となっては何ともない行動が、竜たちを押し留め、今の私達が住む世界へとつながる

事になった。

言わば“狩り”は私達人間が飛竜に対しての主張に他ならない。我々の生活圏を脅かすのなら、我々も戦うと言う意志だ。我々「十頭の龍」はそう言った「帝」に新しい世界を見せられた。

師匠は、この世界が嫌いなのか？

さあ、どうだかな。だがセル、頭上高くにある空を見る。大きく何の弊害も無い。翼があればいくらでも自由な場所だ。お前はいずれ私を超えるだろう。お前はそう言う“龍”だ。

僕は師匠を超えられると思ってない。師匠はずっと僕の前を飛んでいるじゃないですか。

そんな事はない。空は自由だ。そして、龍もだ。

「……………確かに、空は自由ですよ。リーフさん」

親も同然であった今は亡き師の言葉。今の自分を見ればあの人は落胆するだろうか。それとも無表情ながらも微笑んでくれるだろうか。

その瞬間、縦に焚火が割れた。見えない死の斬撃をセルは一瞬、揺らぐ炎で見切ると、側面へと転がる。

二つに割れた火の向こうから双剣
た紅い鎧がこちらへ歩いて来ていた。

超滅一紋を構え

はい？（ ）

月下の戦闘。フィールドはマイナスに近い極寒の砂礫。昼間とは正反対に寒気によって命を奪われる死の冷気。

生身の人間が活動できる温度ではない。それが生半可な知識では生きて抜ける事の出来ない死の大地たる所以であった。

死地にて月の明かりを全身に受けている二つの影は、そのような環境をもろともしない人ならざる戦士に見えよう。

> i 1 1 6 8 3 — 3 7 3 <

攻めるは双剣の者。避わずは蒼き鎧のセル。戦いは優劣を完全に傾けていた。

絶え間ない双剣の乱閃。月明かりに反射する磨かれた刀身が振り抜かれるごとに死を錯覚させる。

確実に鎧の間を狙ってくる……

全身の防ぎようのない関節部分。敵は確実にそこを狙っていた。本来、それだけならば多少強引にでも距離を取り反撃に転じるのだが、此度に交えている相手はそれができるほど、単純な相手ではない。

一見は直線的な剣撃に見えるのだが、一閃の一つ一つに重い剣圧を含んでいる。全身を回避に専念している現状ではさほど問題ではないのだが、たった一瞬の行動の転じに死体となった自分が視界を

よぎる。

しかし、まったく反撃が出来ない訳ではない。未だに鞘に収まっている龍刀を抜く機会は完璧な瞬間でなければ逆に隙を生む。攻撃には法則性がある。人がどれだけ乱則に向かってこようともまったく違う動作を続ける事は不可能だからだ。

瞬間、三撃目と同じ剣筋を刹那で見切る。

同じ剣筋。それが龍刀を抜く一瞬の機会。その瞬間形勢は逆転する

だが、龍刀はその刃を見せる事は無かった。相手の足が柄の先端を踏み、刃の射出を一瞬だけ押さえていたのだ。

その一瞬が危険である。

まさか剣筋はフェイント。この一瞬で自分を仕留める為に

異常は肉体を停止させる。^{レギュラー}相手の持つ二本の超滅一文が首の左右で高速に迫った。

「竜人脚！」

「!?!」

腕よりも脚の動きが速く強靱である。竜一匹を何メートルと吹き飛ばす強力な蹴打。無論、人も例外ではない。その衝撃は骨を砕く。

「……………むう」

片手を岩盤に付けながら後方への力を抑える襲撃者。

「……………一瞬で後方へ移動し威力を半分以下に……………
やりますね」

スラツと龍刀を抜く。あの状況下で竜人脚を判断するとは……………
・相手は人との戦いに慣れている。

「……………貴殿の名はなんと申す」

無口の襲撃者から放たれた予想外の言葉。襲撃してきた以上、自
分の事など認識していると思ったのだが、一体どう言う事なのか……………

「……………セル・ラウトです」

「セル……………。セルよ。此度はお詫びを申し上げる」

不思議と構えを解く紅い鎧の襲撃者。纏っている戦いの闘気も薄
らと消えうせた。

「……………俺か貴方のどちらかが死ぬことに対しての意味ですか
？」

「違う。私の人違いだ」

「……………はい？」

「私は十年余り一人の人物を追い続けている」

「えーっと、つまりその人物と俺を間違えたって事ですか？」

復活した焚火を挟みながら手頃な丸太に腰を落ち着かせているセルは、紅い鎧の襲撃者
カルス・ハルバードから、奇襲の経緯を聞いていた。

「その者は砂漠で目撃され、同時に青い鎧を着ていたとの情報を得たため、こうして砂漠を探し続けること半年。すまぬ」

「なんか途中を省略していますけど……頭を上げてください」

なんとというか、礼儀正しいと言うのか、律儀に正座をし、両膝に腕をのつけて深々と頭を下げてくる。整った彫りの深い顔立ちは生半可な人生を生きてはいない。それ以前に半年も武器一つで砂漠を生き抜いている初老の老人
カルスは相当な腕前のハンターである事は明白だった。

「頭を下げた程度ではすまぬ問題ゆえ。一步間違えていれば貴殿を殺すところであった。本当に申し訳ない」

「だからもう気にしてませんって。勘違いは誰にでもある事ですから」

真面目な人間ほど、気を使ってしまふのは変わらない人の性だ。もっと本気で怒れる性格ならばこれほど苦勞も無かつただろうに。自分って本当にお人よしだなあ。とつくづく自分の性格に後悔する。

本当に申し訳が立たないカルスは頭を下げたまま上げようとしな。このままでは朝まで頭を下げていそいで怖い。

「じゃあ、カルスさんの捜している人って誰なんですか？」

「こう言う時は話題を変える。」

「……………貴殿には話そう。私のせめてもの償いだ」

「いいから早く話してください」

「私が追っているのはある一人のハンター」

「……………ハンター？」

「うむ。名はベリウス。十年前とある大国の王族を殺し、行方をくらませた。ギルド認定のハンターだ。未だに逃亡をし続けている」

「……………それをカルスさんが追い掛けているんですね」

「無論。奴は危険すぎる。当時一度だけ対峙したことがあるのだ」

が、後少しと言つところで逃げられた」

「……………事情は分かりました。でも無闇に青い鎧のハンターを攻撃するのは危険だと思いますよ」

「今回の件で重々承知。今後は改め、取り押さえてから名を聞いて抹殺するでしょう」

「いや……………それ自体が間違ってます」

「遠路はるばるこのような砂漠の辺境へようこそお越しくださいました」

朝日と共に出発し、太陽が真上を照らす日中。

私の力が必要になつたらいつでも呼んでくれて構わない！ その時は惜しみなく手を貸そう！ さらば！

最後にそんな事を叫びながら姿を消したカルスと別れ、昼ごろにノト村に到着。

村の様子は変わりなく、子供達などは元気に走り回ってさえもいる。しかし、道中無残にも破壊されている民家もあり、飛竜の被害

が全くない訳ではなかった。

村人に案内されながら村長の居る民家に辿り着く。

「村長。ハンター殿が来ました」

垂れ幕をくぐり中に入ると、年を取った一人の老人が中央に鎮座し、その左には片腕のない小柄な若い女が座っていた。

「中々早かったのう。手紙を出したのは二日前だというのに」

「到着が早すぎる。おい、お前、依頼紙を出せ。言っておくが無くしたなんて言い訳は外敵とみなすぞ」

人は見かけによらない。小柄の女は体格に似つかない睨みと怒るような声色で依頼書を要求した。

無言でセルは後ろ腰の道具袋から依頼紙を渡す。

「……………野郎の文字か。てこたあ、お前は自分の腕に自信があるのか？」

「自信って程じゃありませんけど、手助けくらいはできると思います」

「言っておくが、ここは塀に囲まれた安全で幸せな街じゃないんだぞ？ 食糧の少ない砂漠を、昼夜問わず腹を空かせた竜どもが徘徊してんだ。野郎の使いでも、足手まといは帰れよ」

「ヤミガラス殿。彼とてたった一人で砂漠を抜けて来

たことにはかわりない。間違っても弱いとは思えんぞ」

「ふん。どうだかな。あたしは野郎どもの所に戻る決行は二時間後だ」

立ち上がり、一度セルに睨みを利かせて部屋から出て行った。

「すまんのう、ハンター殿。彼女は自分の部下以外信用せんのだ」

と、何故か長老が謝る。

「特に気にしてません。よく言われますから。それよりディアソルテの話聞かせてください」

原因は“岩山”から降りて来たディアソルテの幼体を捕獲した事が始まりだった。

ノト村の周囲でガレオスと言う砂竜を討伐していた、とあるハンターチームが、偶然現れた紅角竜の子供を捕獲してしまった。子を捜して親の紅角竜はハンターチームの在留していたノト村に訪れ、甚大な被害を見舞った末に子を取り戻して“岩山”に帰って行った。

しかし数日後、再び紅角竜が現れる。平和になった矢先の出来事

で、ハンターチームも村にはおらず、イーベルから急いで出向いてきた。だが、紅角竜の攻撃は凄まじく、激戦の末に撤退させる事に成功したものの、自分達では叶わないと断言し、イーベルの衛兵団へ報告。

そして現在。現れた衛兵団は子供の捕獲に成功。次は親を捕獲し、村から離れた“岩山”に親子を還そうとしているのだ。

「真に危険な依頼だが、今は衛兵団も居る。ハンター殿は状況を確認した後に、個人の判断で帰ってもらっても結構だ」

「確かに危険な依頼ですが。なぜ子供は一番安全な親の下を離れたのでしょうか？」

子供は無垢だ。だからこそ脅威に対してあまり恐怖しないが、どこが一番安全かは本能で理解しているはず。それが二度も離れた事にセルは疑問を感じていた。

「その問題を解決しなければ、村は何度でも襲われますよ」

行くぞ

「……………あのクソ女あ……………俺の事を雑魚だとお……………上等だ！ 今から乗り込んで細切れに切り刻んでやるうじやねえか！！」

ノト村から遙か南西に離れた、岩場のオアシス。

水辺の周りに張られた複数のテントに、竜たちを管理する木で仕切られた簡素な柵。全くと言っていいほど安全地帯ではないフィードの岩場に、ただ日影と水があったからと言う理由でテントが張られている。

「自重しろ、ジース。お前じゃ、まだヤミガラスには勝てんぞ」

入口の空いているテントの一つから怒りをあらわにしている男へ声がかかった。

「鎧の破損状況から、頭部、肩部、腹部、脇部、に強力な裂傷個所が見つかった。普通の鎧なら四回は死んでる」

テントの中で男の着ていた鎧を丁寧に調べ上げている女は、的確に敗北状況を告げる。

「うるせえぞアマル！ んな事より、他のメンバーはどうした！？ ちゃんと“紅角”を捕獲したんだろうなあ！？」

「さあ？ 報告は来ていないが……………」

「幼体は衛兵団に捕獲された。成体の方は、岩山へ帰って言った。今足取りを追いかけている」

そこへ、肩に鷹を乗せた男が、その脚についている現地の監視者からの報告書に眼を通しながら歩いてきた。

「おいおい、何やってんだよあいつらは。“咆哮龍”の弟子が笑えるぜ」

「私はお前の方が笑えるがな」

「いちいちうるせえぞアマル！」

「言っておくが、今回は捕獲が目的じゃない。ジース、お前も“海炎龍”の弟子なら少しは冷静に判断して動け」

ノト村、西側出入り口。真上からの日光が刺さるその場所は出入口と言っても大きく開けた空間となっている。木材などの住居修復の材料が多く置かれ、多くの村人がそれらを持ち行き来していた。

その広場の隅に、竜用に持ち込まれたと思われる小さな鉄の檻。

中には紅い甲殻をしたディアブロスの姿。ディアソルテの幼体である。

「んあ？ なんだお前来たのか？」

眠っている幼体を見張るように檻の前に座っているヤミガラスは、後ろから檻を覗くセルに視線を向けた。先ほどと変わらない睨むような視線だが、これが彼女の標準なのだろう。

「はい。せつかくなのでディアソルテを見て行こうかと」

「観光気分は帰れ。ここは戦場だぞ」

「依頼を受けた以上、何か手伝えることはないか
と思っただけです」

相変わらずのその言葉にヤミガラスは腰を上げた。

「いいか、あたしの部下はこいつのせいで二人殺された。普段から戦いを舐めてた奴らだが、生き残る力は十分に持ってた。それでも死んだんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あたしはどんな命でも平等だと思ってる。だから、二人が死んだ事に納得はしているが、後悔だけは絶対に消えない。部下の命はあたしの命も同じなんだよ。一人死ねばそれだけその場に居なかつた事を後悔する」

自分の下にいる者は自分が守る。手の届かない場所に行くのなら、

死なないように徹底的に鍛える。それがヤミガラスの心情だった。

「だけど、お前は違う。あたしの仲間でも肉親でもない。だからお前が何をしようが勝手だ。だが、もしあたしたちに害を及ぼすような行動をとるのなら、その場で殺してやるよ」

ヤミガラスがセルに向けている眼は脅しではなく、そのような状況に陥った場合、ためらいなく今言った行動を即座に取ると言う事だ。

「組長、準備できました」

「ああ、行くぞ」

茶色いディアブロス装備を付けた男の声で、セルから視線を外す。

「この件はあたしたちが終わらせる。お前はおとなしく村にいる」

凄みを残して告げると、男と歩いて行った。

相当な場数を踏んでいるその背中自分との差はほとんどない。

失う事に慣れていないのは正常の証でもある。

「今は彼女にあまり話しかけない方がいいわよ？」

呆けるようにその背中を追っていたセルに反対側から声がかかった。

振り向いた視線の先に立っていたのは、リオレウスの鎧を着たハンターだった。ラシーラがリオレウスの装備をつけていたが、あち

らは女性用に全体の重量が軽くなっている為、男性用よりも肌の露出が多い。目の前にいるのは男性用の鎧を着ている、しっかりとした表情をした女性だった。

「君は？」

「私はエミリア・トートレス。見て分かる通りハンターよ」

男性物の鎧を着こなすエミリアは、この地に依頼で訪れたゴールド公認のハンターである。整った顔立ちに可憐な金髪の髪をポニーテールで纏め、僅かに背が勝るセルを見上げていた。

「所で、貴方の方は？」

「何が？」

「何が？」じゃないでしょ。貴方は何者かって聞いているのよ」

「ああ、ごめん。俺はセル。君と同じゴールド公認のハンターだよ」

エミリアは納得したように目を向ける。

「じゃあ、貴方も依頼で来たのだけれど、衛兵団にもう用はないって言われたのかしら？」

「まあ、そんなところです」

セルは複雑な笑みを浮かべながらディアソルテの子へ視線を移す。

「でも、衛兵団が来たのなら、本当に何もする事が無くなってし

まったわ」

「そんなに凄いですか？」

「貴方……何も知らないのね」

「すみません。まだゴールドに来て半年も経っていないので……」

「エミリアは貴方本当にゴールド公認？」　と言い、呆れたように説明を始めた。

「ゴールド騎士賢王国は、十字に割れた巨大な山壁の間に造られた王国である。」

その十字の中央にゴールド本国。そして東西南北に位置する山壁の中に四つの街が造られており、そこは飛竜と交戦する最前線なのだ。昼夜問わずにいつ飛竜の襲撃があるか分からない。街の警護を任されている衛兵団は本国から派遣された兵によつて統率されている。エーベルを護るのは、前線近接大隊と後方射撃大隊の二つ。その中で後方射撃隊長　　ヤミガラス・ケイミは、元守護騎士第二部隊の副隊長を務めていた強者である。本国でも最強クラスのハンターが来ている以上、自分たちの出番はほとんどない。

「まあ、彼女は特に戦闘では鬼神のごとき活躍をするらしいわ。実際に見たわけではないけどね。実力は折り紙つきよ」

エミリアの言いたい事はよくわかる。しかし、戦場と狩猟場所は全く別のものだ。一時間前は有利に戦えた地形も、環境の変化で逆転してしまう場合がある。そうなった場合、有利なのはその大地で育った飛竜達だ。

「正直言つて彼女達では少し危ないかもしれませんよ」

視界にとらえられるほどの巨大な岩山。アレは飛竜達の王国である。頂点に立つ紅角竜は、従えるだけの角竜を率いて子を取り戻しに来るだろう。そうなる前に決着をつけなくては、次に砂漠になるのはノト村だ。それも失敗は許されない。

「だったら、どうするの？」

エミリアの表情に浮かんだ美しい頬笑みは、その先にある言葉を待っているようだった。

「俺達も行きましょう」

オアシスに張られたテントが突如騒がしくなり始めたのは、見張りをしていた者がこちらへ向かってくる竜を視野で捉えたからだった。

「おい、うるせえな！ 一体なんだ！」

「大変です！ ジースさん。砂竜の群れがこっちに

「なに!?!」

武器の片手剣を研いでいたジースは慌てて立ち上がると、こちらへ向かって来ている方角へキャンプから外に出て確認した。

見た限り数は二十弱。まだ確かではないが、砂をかき分ける音は二十では済まない。後方にまだ何匹がいる。合わせて三十弱ってところか。

「まあ、憂さ晴らしにはちょうどいいぜ」

と、口では言ってみたものの鎧無しで武器のみ。正直一人では辛いの悲しい現実だ。

「元々は飛竜達の休憩所だからねえ」

テントから様子見に出てきたアマルはかなり余裕にそう言った。

「おい、アマル。俺の鎧、修理終わったのか!?!」

「いいや」

「じゃあ、お前も戦えるのか!？」

「いいや」

「だったらテントに入ってる!!」

「言われなくても。私死にたくないし」

クソツ。ますますむかつく。目の前に迫る大量のヒレ。現状で砂漠を泳ぐその姿に地味に恐怖を覚えてしまう。

「おととつと。助太刀しようか？」

その時、後ろから現れたのは本国からキャンプ団に着いてきた、なんともまあ、ふざけた護衛の女だった。何故なら持っている武器が一本の普通な刀だったからだ。服装も着物に袴という、殴りたくなるような格好だ。

「レフィン。テメエ、マジふざけてんのか!？」

「やだねえ。ジーくん。目とか鼻とか突けば案外いけるんだ。これだ」

正直、この女の実力は知らない。本国が護衛にたった一人でつけろくらいなのだから、大層強いと思っただけ、現状ではまったく役に立たないものばかり持ってきている。本とかお菓子とか、女じゃなかったら怒りのあまり一発殴っているところだ。

そんな事をやっている間にも敵の影団は今も接近してきている。こいつはあてにならない。一番先頭の奴をまず砂ごと叩き斬る。とりあえず注意をこちらへ引き、キャンプの離れたところで、音爆弾で足止めをし出来るだけ狩る。

片手剣を構えながらも片方の手でポーチの中にある音爆弾を握ると、こちらへ向かっていた影団は次の瞬間に一齐に砂中から飛び出してきた。

「なに!?!」

予想外の展開。いや、ちがう奴らは水を飲みに来ているのだ。ならばより湿り気のある泳ぎにくい砂地は避けるのが基本。事前に砂から上がるのは当たり前前の動作だ。

「クソ!」

自身の経験と予想不足に腹が立つ。前もって出向いた方が迎え撃ちやすかった。砂中にいなければ音爆弾は無力であり、足止めは出来ない。更に距離があれば砂弾によってキャンプは壊滅する。慌てて敵の団に駆け寄る。距離は100メートルほど。注意さえ引く事が出来れば何とかなる。

その時

「……………? なんだ?」

何かが変わった。思わず足が止まる。これは何か、圧倒的な何か来る。

砂上へ姿を出していた砂竜達は、何かを探すように長い首を四方へ巡らせていた。一体何を探しているのか。すると

「！ あれは」

砂竜達の後方の空に一匹の飛竜がこちらへ向かって飛行してくる。その羽音に気がついた砂竜達は一斉に蜘蛛の子が散るように慌てて逃げ出し始めた。飛竜はジースの前で停滞するとゆっくりと着地する。

棘竜エスピナス。その姿は見たものはほとんどおらず、未だに生体に謎多き飛竜だった。名前もギルドで正式に付けられたのは近年で、掃討された数は十匹に満たないと言われている。

全ての人間を見下す眼光は熟練ハンターでも竦んでしまうほどだ。しかし、ジースが感じていた圧倒的な気配はこれではない。その背から降りてきた砂塵避けのフードを全身に纏った男だった。

ゆっくりと歩いてジースに近づいてくる。その威圧感は大抵の忍耐では耐える事が出来ないほどだ。実際一歩ずつこちらへ向かってくるだけで押しつぶされそうな気配。同じ人種とは思えない。

「………精進しているな」

自分の目の前に一歩止まって一言そう告げると、ポンと肩に手を一度だけ置き、そのまま横を通り抜ける。その後ろにエスピナスも続き、威圧感が通り過ぎて行くのを感じながらようやく重圧から解き放たれた。

「……………マジかよ。アレが……………『三凶龍』」

まともに呼吸できる状態になってから、全身に汗をかいている事に気がつく。そしてキャンプに歩いて行く後ろ姿を目で追った。

「あ、ストライダー様！」

レフィンとは、歩いてくる人物を見て声を上げた。その声色は歓喜そのものだ。

「レフィンか。護衛御苦労。引き続き頼む」

元気に抱きついてくると見上げながら、はいと答える。

「ス、ストライダー様！ な、なぜ、ここに!？」

なんかうるさいなあ。とテントから出てきたアマルはキャンプの入口に立っている男を見て声を裏返す。

「アレスの6番弟子か。ここの鎧調整は任せるぞ」

「は、ははあー!」

拜むように頭を下げるアマルの左から、肩に鷹を乗せている男が驚いたような表情で駆け寄ってくる。

「これは。ストライダー様！」

「ルナミナスはどこだ？ カナク」

レフィンをゆっくりと離すと彼女に、ピナスに水を飲ませてやってくれ、と告げてからカナクの横に並んで歩く。

「ルナミナスさんは、ただいま弟子達の修行を監視中です」

「『紅角』か」

「はい」

現地より送られてくる詳細なディアソルテの資料を受け取り詳細に読む。

「メンバーは？」

資料をめくりながらカナクに尋ねた。

「海炎龍が弟子ジース・フランク。疾風龍が弟子ミサ・トラン。咆哮龍が弟子カルマ・フォルンです」

「その中でジースが脱落。ゴールド側との交戦は想定内だが、我々を退ける者がいるとは、流石に伊達ではないな。しかし目的は討伐ではなく奴の“角”だ。このメンバーで大丈夫か？」

その言葉にカナクは唾の悪そうな表情で告げる。

「それが、既に幼体の方は衛兵団に保護されておりまして……」

告げられた言葉に一瞬だけ間をおくと、

「私が行こう。武器を一つ借りて行く」

帰れ

「駄目だ、帰れ」

セルの提案は、岩山を目指していたヤミガラスの剣幕に叩き潰された。

「いいか？ 何度も言うが、遊びじゃねえんだよ」

「あら、私たちだって遊びじゃないわ。一応生活がかかっているもの。それに何よりも失敗は許されない。そうでしょ？ 私たちは勝手にやるってことにすれば別に問題はないでしょ？」

相手の揚げ足を取るようなエミリアの提案はヤミガラスの反論を封殺した。説得が下手な自分は事の成り行きを黙って見守る。

「組長。彼の方はともかく、彼女の方は期待していいと思いますよ。エミリアは何度も岩山での討伐依頼をこなしていますから、共に行動する、しないにしても我々に危険が及ぶ心配はないと思います」

部下の意見も重なり、ヤミガラスはイラつくように、

「あー、わかったよ。バン、お前がそこまで言うならしょうがねえ。おい、お前ら。岩山に入ったら、何が起こってもあたし達は助けねえからな。自分の身は自分で守れ」

不機嫌そうに先立って歩みを進めていくヤミガラス。バンはやれやれという風に、そのあとに続く。

「流石バンさん。説得がうまいわね」

「あの、強面で頑固そうな彼女をよくもまあ」

セルは感心するように一団の最後尾にエミリアと一緒に歩いて行った。

砂嵐により時々視界が妨げられるフィールドを岩山に向かって先頭を歩くのはヤミガラス。次にバン、そして二人の部下、その後ろにセルとエミリアの順だ。

他愛もない世間話をしながらヤミガラスに注意されない程度に歩いていると、ふと進行が止まった。

「？」

エミリアと二人して先頭で停止して下を眺めているヤミガラスとバンに近づく。

「どうしたんですか？」

「砂竜の巣だ。クソツタレめ」

ヤミガラスは忌々しげにつぶやく。下に広がっていたのは無数にうごめくヒレだった。その数見た限りでは七十はいる。それが岩山の入口を見事に妨害しているのだ。

「巣は迂回してもあっちこっちにあるから、無駄に時間をかけるだけよ。正面から突破した方がまだ勝算はあるわ。ヤミガラスさん」

何度もここへ訪れているエミリアの助言は的確だ。ここは強引に邪魔をするモノだけ切り捨てて強引に岩山へ入り込んだ方が消耗は少ない。しかし、それには一つ問題があった。

「残念だが、それは無理だ。捕獲した生体ヤウイを村の近辺まで運ぶ必要があるからな。どの道この道は通行可能にしておかねえと」

「ですが組長。掃討していれば時間と体力をかなり消費してしまいます。そうなってしまうえばタイムリミットに到底間に合いません」
いくらこの人数でもこれだけの砂竜を全て倒すには半日近く時間を使ってしまふ。更に岩山からディアブロス達が出てきた時点で全てが終りだ。

「二手に分かれるぞ」

ヤミガラスが告げる。現在の状況では最良な方法であるが、ディアソルテ相手に戦力を分散するのは有効ではない。

「グダグダ考えても始まらねえ。掃除組と捕獲組に分ける。飛竜

の世界は縦社会だ。ボスを捕まえれば大人しくなってくれるさ」

その場にいる全員が感じていた。目の前に存在する岩山から、一際威圧的な気配が周囲に漂い出ている事を。この場合は殺気や悪寒にも似たディアソルテの気配である。

「捕獲組は三人。バン、エミリア、それとそこの蒼鎧」

「俺もですか？」

本来、同行を懸念していた自分とエミリア選ばれた事に疑問を抱く。

「不満か？」

「いえ、そういうわけでは」

どちらかと言えば、自分の太刀たがは数いる敵の掃討戦に向いている。敵を翻弄しながら敵に知命打を叩きこむのが太刀の基本だ。ゆえに今回のような複数との戦闘はヒット&アウェイの太刀は有効な武器である。それは彼女も分かっているはずだ。

「これは衛兵団の依頼だから、部下バンが同行するのは当たり前。エミリアは“岩山”の地形に詳しい。そして複数戦闘の乱戦においてはよりチームワークが必要だ。だから余ったお前は捕獲組だ。反論は帰れ」

なるほど。そう言う事か。捕獲したとしても衛兵団が同行していた事で仕事を横取りされる事はない。そして手伝ったという名目で自分達に報酬も用意できる。無愛想な性格だと思っただけ意外と気を

使ってくれたらしい。

「何見てやがる」

ほのぼのしたセルの視線にヤミガラスは標準の睨みを向けた。

「いえ、ヤミガラスさんって優しいなって思いました」

その言葉に、ヤミガラスは固まった。まるで石になってしまったかのように時間が止まる。

あれ？ セルが五秒ほどして疑問に気がつくと、次の変化はトマトのように顔が真っ赤になっていく慌てた彼女だった。

「ば、馬鹿野郎！ な、何言ってるやがる！ や、優しいわけねえだろ！ 殺すぞ！」

明らかに声が裏返っている。同時にものすごく恥ずかしそうに照れている事は一目瞭然だった。

「あら、ヤミガラスさん。意外と可愛いところがあるのね」

エミリアの言葉がトドメとなり、ボンツと頭から煙を出したヤミガラスは何か言いたそうに口をパクパクする。

「組長にそういう系統の言葉は禁句だ。はつきり言って先に進まなくなる」

「そうなんですか？」

「耐性がないらしい」

この人面白いなあ。とそんな事を思いながら人形のようにパクパクするヤミガラスが元に戻ったのはそれから三十分してからだった。

「ケイン。ライナ。全部叩き潰す。ケイン、龍枷の使用は極力控える。ライナ、敵をなるべく戦闘不能にしろ。仕留めきれない奴はあたしが止めを刺す」

「……了解だ」

「分かりました。組長」

二人の肯定を聞くと、縦横無尽に砂の中を泳ぎまわる砂竜へ前進して行く。

それほどの間がなく、一匹の砂竜が気づくと、三人の中で一番小柄で、上半身に鎧を着ていないヤミガラスに一直線に向かってくる。牙のとどく射程距離に入ると、一度潜り、ザバツと空中に飛び出すとその牙を大きく開いた。

ケインとライナはヤミガラスから離れるように左右へ回避する。巻き添えを食らわないためだ。

ヤミガラスは背中にある大剣『エピタフプレート』を拘束から外すと隣の砂に叩きつける。波のように勢いよく視界を覆う。砂竜は目くらましの向こうにいる敵を勢いよく食らいつく。

「おい、三下。見た目で敵を判断しない方がいいぜ」

砂竜が噛みついた場には誰もいなかった。次の瞬間、真上から頭に大剣が突き抜ける。無論即死。砂漠の柔らかい砂地に打ち付けるように大剣が砂竜の頭を貫いていた。

「見た目で敵を判断しやがって。こいつの前世は人を見る目がない野郎か」

その頭に深く刺さった大剣を、返り血を避けながら片手で易々と引き抜く。

「次、きやがれ！」

仲間が殺された砂竜達だったが、ヤミガラスの気迫に一瞬だけ躊躇いを見せた。

「組長本気ですね」

「こちらも………派手に引きつけるとしよう」

ケインとライナもそれぞれの武器を取り出すと、一斉に向かってくる砂竜に身構えた。

「どうやら、組長達がうまくやっているみたいだ」

砂竜達が気を取られた隙について、岩山へ到達した捕獲班はエミリアを先頭に内部へ入る。

「大丈夫ですかね。ヤミガラスさん達」

外で聞こえる不確かな地鳴り音を敵のモノか味方のモノか区別できないセルはバンに尋ねるように訊いた。

「大丈夫だ。組長がついているからね。何とかなるさ」

完全に信頼を寄せているバンは短くそう告げると、エミリアとルトの相談をする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何かおかしい。飛竜達の生息地域にある独得の広域状況。外で交戦中のヤミガラスさん達は当たり前として、岩山内部は居る自分達の存在は飛竜側に知られていないはずだ。それなのに、飛竜達とは

別にこのピリピリした空気は既に何者かが居るような気配がする。

「この“岩山”は、一段、二段、三段と分かれているわ。一段目が私たちの居る場所。二段目はディアブロス達の巢。三段目がディアソルテと飛行系の飛竜達の巢がある」

「予想以上に時間がかかりそうだな。一つずつ登っていく他にルートはないのか？」

「じゃあ、壁面を登ってみる？」

「中を行こう。出来るだけ最短で頼めるか？」

「任せて」

一分でも惜しい状況であるため、素早く移動を開始する。

「？ セルさん」

エミリアに呼ばれて慌てて返事をする。彼は何か考えているようだった。

「どうしたの？ 何かあった？」

「……………いえ。ちょっと、意外な内部構造に感動しただけです」

「物見遊山は採取フレイの時にしてくれ。急ジツ」

「はい。すみません」

セルが見つけたのはエミリア達から死角の場所にあった、無数の
弾痕だった。核心はない。しかし、もしかすれば。嫌な
予感が脳裏をよぎる。それは昔よく感じた、“死”の予感だ。

帰れ（後書き）

次回予告

屍の群れ。

現れるもう一匹。

近づく凶威。

いるのは、竜か？

それとも

次話 “母親”

お知らせ（前書き）

物語変更のおしらせ

お知らせ

此度は、モンハン小説『蒼い旅人と碧の歌』をご愛読していただき、誠にありがとうございます。

それと同時に、先に読者の皆様に謝罪を申しておきます。本当に申し訳ありません。

ストーリーを先の続けにくい展開となってしまうため、一度全ての話を一から考え直させていただきます。

主人公とヒロイン、その他の登場人物は名前を変えるつもりはありませんが、設定などを勝手ながら、物語を進めやすい状況へ大きく変えさせていただく予定です。

これからの更新を心待ちにしていた読者の方々、本当に申し訳ありません。

今、新しい話を書き始めている最中です。今後は短い更新期間でできるよう一層、努力していこうと思います。

本当に申し訳ありませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2879e/>

蒼い旅人と碧の歌

2011年10月4日19時35分発行